
恋姫無双 曹丕伝

鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双 豊不伝

【Zコード】

N5172N

【作者名】

鈴

【あらすじ】

曹操の弟として生まれた青年の、長く険しい、しかし明るい戦乱の記録。彼はどのような道を歩み、その果てに何を見つけるのだろうか。

という長ったらしい駄文です。初投稿ですので適当に見守ってやってください。恋姫の一次創作です。キャラ壊しなどあつたらすみません。

序（前書き）

主人公の名は曹丕。字は子桓。真名は華景といいます。
このキャラ以外にオリキャラは追加するつもりはありません。
では、どうぞ。

序

漢王朝の時代。それは長く、平和で、そして腐っていた。
俺が物心ついた頃の漢は、特に酷い有様だったことを良く覚えて
いる。

曹家に生まれ、曹丕といふ名と、華景^{かけい}という真名を授けられた俺
は、幼い頃から華琳 賢姉と共に母に連れられて洛陽に行くこと
もあった。

その時に見た光景を今でも鮮明に覚えている。

活氣のない街。飢えた民。子供ですら虚ろな目で道端に転がって
いた。
当時の俺はそれを見て、これが華の洛陽かと驚愕した。そして同
時に、激しい憤りを感じた。

街を見ただけで分かる、腐った宦官達の行いに。

そして俺は、その頃から心に決めた。誰も飢えない、何者にも困
しない国を造ると。

賢姉にその話をすると、賢姉は笑つて俺を撫でてくれた。

「そうね。必ず、強い国を造りましょう

そう言つてくれた。

今思えば、あれが俺達姉弟の始まりだったのかもしれない。

それから俺達は、それまで以上に勉学に、武の鍛錬に励んだ。
軍略を学び、政を学び、己の武を高めた。

夏候惇　　春蘭、夏候淵　　秋蘭の姉妹に出会つて、皆が競いあつた。

そして青年と呼べる年齢になつた頃、俺は賢姉との決定的な違いに気付いた。

賢姉は非常に頭がいい。今までに学んだことを全て貪欲に吸収し、自分のものにしていく。

教えに来た老師を口で食かした時は流石にやり過ぎだと思ったが。そして武も、一兵卒では束になつても敵わないほどに強い。

かと思えば、詩を詠み、舞いを嗜む芸術家のような才能を垣間見せる。

人を惹きつける風格も、生まれたその時から持つていた。

まさしく完璧だった。賢姉に出来ないことなど、さつとないのだ
う。

それに比べて俺は、賢姉ほど頭が良いわけではない。
軍略に関しても政にも、賢姉には届かない。これからも届くことはないだろう。

詩も詠めないし舞いも不向き。その手の才能は皆無だった。
だが、そんな俺でも唯一、賢姉に勝てるものがあった。

それが俺の武。

賢姉と同じ大鎌【断】では、賢姉にも、夏候姉妹にも負けたこと
はない。

これが俺の誇りだ。誰にも負けない武。誰にも負けられない武。
だから俺は、誓いを立てた。

どんな敵だろうと、どんな状況だろうと、俺は最後まで背中を見
せない。

そう誓つたんだ。

陳留の刺史となつてから随分と経つた気がする。
思い返せばあつという間だつたけれど、忙しそうでそんなことを
する暇も無かつたといつことか。

ふと窓の外を見ると、小鳥が一羽、仲が良さそうに飛んでくるの
が見えた。

そういうえば、最近は華景の顔を見ていない。
お互に忙しいとはいへ、少し寂しさを感じる。

未だに弟離れできていない自分に苦笑する。こんな事では華景に
笑われてしまうかしら。

でもそれはあの子も同じ。あの歳になつても昔と変わらず賢姉と呼
んで慕つてくれる。

あの子は強い。だから心配はしていない。

最後の書簡を書き終えてぐうつ、と体を伸ばすと、扉が開いて秋
蘭が入ってきた。

「華琳様、お疲れ様です」

「ええ。でもこれで一段落つけるわね」

「そうですね。兵のほうも練度は高まっています。姉者と華景様の賜物です。

それに、よりやくお一人にお休みいただけますから」

秋蘭の言葉に、私はともかく華景が休暇を取つていなことに呆れた。

本当にあの子は、無茶をする。

「華景様にも同じ事を言つたら、『賢姉は無茶をする』と笑つていましたよ」

「華景にだけは言われたくないわね、その言葉は」

それを聞いていて、自然と顔が綻ぶ。
流石は姉弟と言つたというかしらね。同じ事をして呆れあうなんて。

「だったら早く休もうぜ? 賢姉」

扉から聞きたなれた、しかし懐かしさを覚える声がした。

そちらを見れば、蒼い外套を身に着け、少し長い黒髪をうなじで纏めた青年　　華景が、いつもと変わらない笑顔を浮かべてたつていた。

しかし、笑顔の田のしたには若干の隈があり、疲れきっているのがよく分かる。

「私はいいから貴方こそ早く休みなさい、華景。顔が酷いことにな

つてゐるわよ

「いや、俺より賢姉の方が重症だぞ。白髪の髪が少し荒れてる」

「今日はお風呂の日だから後で直すのよ。それに華景にせつかくの外套が汚れてるわよ」

「後で洗濯するから問題ない。それより

「お二人とも」

言い合つ私達に、秋蘭の凛とした声が響いた。

言い争いに夢中になっていた私達ははつとして、秋蘭を見る。

秋蘭は真顔で、心なしか呆れているよつて見えた。

「お戯れになられるのは良いのですが、お二人ともこれ以上ないほどにお疲れです。

今日はもう仕事はあつませんから、早くお休み下さー

「え？ 警邏と調練はまだ終わってないぞ？」

「私と姉者で行つておきまー

「まだ政務が残つていたはずだけビ?」

「急を要するものはあつません

「だつたら鍛錬でも

「今日は庭師が中庭の手入れをしておりますので、中庭は使えませ

「ん

「なら兵法書でも読もうかしら」

「申し訳ありませんが、今は書庫の整理をしておつます」

是が非でも私達を休ませたいらしい。

あの手この手で私達が仕事に関わるのを阻んでくる。

最後にはこちらが根負けして、ふう、とため息を吐いた。

「分かったわ。そこまで言われたら仕方ないわね」

「…………賢姉、その兵法書置いつぜ」

「華景JANNAの武器を出しなきこ」

「「「…………」」

私達はビームでも仲のこい姉弟だった。

休暇 — (前書き)

あれ、おかしい。始まっていきなり休暇とか・・・。
ま、まあ、気にしないでおいで。うん。

秋蘭に無理やり休暇を取られ、俺はどうしたものかと悩みながら城内をふらふらと迷い歩いていた。

何せ練兵場に行けば夏候姉妹に追い出され、執務室に行けば文官に説き伏せられ、鍛錬をしようにも武器を没収され、書庫に向かえば何故か門番に追い返された。一体俺は何をすればいいのか。

そうしてふと考へると、俺には趣味といえるものがない。強いて言つならば鍛錬なのだが、これは禁止された。

我ながら、本当に面白みのない人間だな、俺。

苦笑しながらふらふらとしていると、城門前でぱつたりと賢姉に会つた。

「賢姉、どこか行くのか？」

「ちょうどここにいたわね。華景、付きてなさい

俺が声を掛けると、賢姉は俺を見た途端に笑顔になつてすばやく俺の右腕を驚づかみにする。さらには絶対に逃がすものかと言わんばかりにギリギリと力を込めてくるから

「賢姉血が止まるー 腕がもげるつてえええー！」

「やつ、早く行くわよ」

まるで聞いちゃいない」様子の賢姉。清々しいほどの笑顔が痛い。

ああ、あの笑顔は俺にとつて良くないことを考えてる顔だ・・・。

抵抗できない俺は、今日が無事に終わることを祈りながら賢姉に引き摺られて街に向かっていくのだった。

服屋。

それは服装を意識する女性にとって非常に大切な、どれほど時間をかけても足りないほどに重要な場所。・・・らしい。

「華景、これはどうかしら?」

「ちょっと伸びしそぎじゃ すみません何でもないです」

服屋。

それは、俺の寿命が削られ続ける恐ろしい空間である。

服屋といえば、賢姉は昔から断固として可愛い系の服を着なかつた。ふりふりのやつとか、ふわふわしたやつとか。

その理由を聞いても笑顔で威圧されるだけで教えてもらつたことはないが。

「賢姉つてもう少し可愛い系の服も着ればいいのに。綺麗系より似

合つかもよ?」

「貴方が着てみる? キツと素敵になるとになるでしょ? ね」

人はそれを『見るに耐えない』と言つ。

そもそも六尺(180cm)近い体格の俺がそんなことをした日には、俺はあまりの羞恥心と氣色悪さに長江に身投げする自信がある。

というか普通に田に毒だ。

「ま、まあ、それは遠慮してくれ

苦笑いを浮かべて辞退すると、賢姉は残念ね、と呟いて再び服選びに戻つていった。

「この服屋は初めて來たが、意外にも前にいた街よりも服の種類が豊富なことに感心した。

女性服専門だからなのか店員も客も女性ばかりなのがちょっと辛いが、それはいつもの事と視線を受け流す。

ここまで散々こうした買い物につき合わせられてきたために、こうした空氣に耐性がついてしまつた。

なんとも複雑な気分だが、役に立つてゐるから良しとしておこう。

「これなんかどう? なかなか良いと思うのだけど

「おおう、ちつと見え過ぎてないかい? 主に中が

いや、流石にそれはないと思つぞ、我が姉よ。

それからあれやこれやと服を見て回つて、気がばそろそろ匂餉時となつていた。

服屋を後にした俺達は適当な（賢姉お勧めの）飯屋に入った。外装からして高そうな店だが、内装もこれまた高級感溢れるもので、奥は個室になつているようだ。

こんなとこ来たら財布の中が素敵な事になりそうだな。

「これはこれは曹操様に曹丕様。よつこいりつしゃいました」

奥から恰幅の良い店主が揉み手をしながら笑顔で出迎えてくる。それに適当な返事を返すと、慣れた様子で奥の個室に案内された。賢姉はここに常連らしい。よく財布の中身を持つな・・・・・。

席に座つて注文を済ませ、微妙な間が空く。

いつした間が空くと、何故か俺が話を振らなくてはならない使命感に駆られてくる。

別にそんな必要はないはずなのだが、無意識の俺は知らぬ間に話題を探して話していた。

「最近、近隣の賊共の動きが活発になつてゐるらしいな。
隣の州牧のところは特に酷いことになつてゐるよつだ」

頭を捻つても仕事の話しかなかつたのが残念だが、これも重要な話だ。

管路の似非占いが広まつた後、それを待つていたかのように賊の動きが派手になりだした。

漢には期待していないが、各地の諸侯がそれを抑えられないほど無能だとは思わなかつた。

これが何かの前触れかは分からぬが、準備はしておいて損はない

いだらう。

「ええ、みたいね。それも気になるけど、もつ一つ気掛かりな事が
あるのよ」

「んん？ 賊に関してか？」

「この間、豪族の屋敷に賊が押し入ったことがあつたでしょ？
その時にその豪族が隠し持つていた書物が盗まれたらしいのよ」

豪族が隠していた書物、ねえ。

賢姉が興味を持つほど の物なら限られてくるが・・・・・。

「・・・・・太平要術の書。聞いた事くらいはあるでしょ？」

「ん～・・・・・あるにはあるが、実在してたのか」

太平要術の書といふのは、持つ者によつて価値が変わる奇怪な書物だつたか。

何が書かれているのか興味はあるが、そんなものは無いだらうと思つていた。

「それを奪つた賊が、まだこの辺りにいるかも知れないの。
賊の討伐をするならついでに手に入れたいものね」

「せりひと言づ事じやないからな。でもまあ、確かに一度読んでみ
たくはあるな」

「トらない内容じやないことを祈る。

久しぶりの休暇も、結局仕事からは抜け出せない姉弟であった。

休暇 — (後書き)

予想外に長くなりそうだったから無理やり切つたけど、やつぱりおかしくなったかな？

次は季衣とか桂花とか、出したいなあ・・・。

一話（前書き）

ついやく書き終わった。
桂花が何故かこんな性格に。

休暇を満喫した俺達が仕事に戻つて数日、我らが曹操軍は賢姉の指揮の下に賊討伐の準備を行つていた。

陳留では賊の数は減少してきているが、前にもいつた通り、近隣の太守や州牧が無能なせいで全体的な数は増え、何やら不穏な空気が大陸を覆い始っている。それを感じた賢姉は、賊の討伐を名目に軍を動かし、名を上げようとしているわけだ。

かく言つ俺も、この数日はまさにてんてこ舞いであれこれとしていたわけで。中途半端に頭が回るのは考え方だな・・・。

そして今、俺は城壁の上に腕を組んで立つていて。別に暇だからかつこつけてるわけじゃないぞ。糧食を任せた誰かさんの報告を待つていてるだけだ。

賢姉の趣味と実益を兼ねて定期的に行つてている仕官募集で、たまたま面白い文官志望がいた。

その時の試験官は俺じゃなかつたが、秋蘭曰く「手際がいい」らしい。文官が不足している俺達にとつてはうれしい話だが、実際に仕事が出来るかどうかはまた別の話だ。それを見る上で、糧食を任せたんだが・・・。

「・・・・・遅い」

待つこと一刻。

これほど待たせてまだ来ないとは・・・。誰かさんはよほどいい根性をしているらしい。

さつきから俺の後ろをちょろちょろと走り回っている誰かさんは特に。

猫の耳を模した頭巾を被つた、小柄で若干垂れ目な、性格がきつそうな文官風の誰かさんは、書簡を持って一刻ほど前からこの辺りをうろうろとしている。誰かを探しているのは一目見れば分かる。誰を探しているのかも分かる。そしてそれが何処にいるのかも。

これはあれか。上高を甘く見ているのか。

「おい、猫」

こめかみを震わせながら、とりあえず声を掛けてみる。
しかしそれを誰かさんは華麗に無視してくれた。まるで俺がいかのよう見事に。

「お前だ、猫」

もう一度声を掛ける。

無視。

ああ、なるほど。これが無視される人の気持ちなのか。
確かに怒りたくもある。

眉間を押さえて一度大きくため息を吐き、すう、と空気を吸い込む。

「……………そこのお前だ……………」

これでもかとこうくらに声を張り上げ、城中に響き渡るほど

声量で怒鳴る。

びりびりと空気が震えた。

それでようやく誰かさんは動きを止め、涙目になりつつも勢いよく俺に振り返って睨んでくる。

「な、何よ！ 私はあんたみたいな男に用はないわ！」

負けじと怒鳴り返していくが、その姿は怯えて威嚇していく猫のもの。

これが期待の文官かと思うと、些か不安になつてくる。

「お前が荀？ だな？」

こんな姿を見せられたら怒氣も失せてしまい、呆れ半分で一応の確認をする。

「そりゃー 何か文句あるーー？」

ある。大いにある。主に態度や言葉遣いに。

そう思いながらも出かかった言葉を飲み込み、努めて冷静に次の言葉を選ぶ。

「お前に任せた糧食の帳簿がまだなんだが？ まさか、まだ出来ていないなんてことはないだろうな？」

「何で男のあんたにそんなこと教えなくちゃいけないわけ？ だいたいあんた誰よ？」

まさか変態！？ 近づかないで妊娠するでしょ！」

変態つて・・・。つてか近づいただけで妊娠するなら今頃は國中

が子沢山になるだらう。

「俺がそれの責任者の曹不だからだ」

だからな、さつさとその書簡を渡せ。いつまはお前に付き合つて
いるほど暇じゃないんだ。

俺が名乗ると、荀?の顔色がさつきとは打つて変わつて別の意味
で怯えた顔になり、ピタリと罵声が止んだ。
この猫、俺の顔を知らなかつたのか。それでもなければあんな事
は言えないよなあ。

桂花 side

え？ ちょっと待つて。この男が曹不?
確かに何処と無く曹操様と似てる氣もするけど、え?
ということは、私、曹不様に向かつてあんな事言つてたの？

血の氣がさつと引いていくのが自分でも分かるくらいに青ざめる。

曹姉弟の仲の良さとその才覚は有名だ。この一帯の州で曹姉弟を
悪く言う者はまずいないほどの善政を敷き、また才能ある者ならど
んな身分でも取り立てる一風変わった人柄。姉弟で街を歩いている
ところもよく見られているらしい。

そんな方々だからこそ仕官したのに、早速やつてしまつた。自分

の「」の口が嫌になる。

曹丕様は寛容な方だと聞いているが流石にこれは絶望的だらうな、
と他人事のように思つた。

男が相手だと、何故か私は口が悪くなる。

別に本当に男が嫌いなわけではない。ただ氣づいたら罵声が飛び出している。そのせいで今までろくに男と話したことがない、影で色々と言われていた事も知つていて、でも、どうしても治すことが出来ない。自分ではどうしようもないと諦めているし、今まで男の上官が居なかつたこともあつてどうともなつた。

でも今回はそれが仇となつた。

このままでは良くて追放、最悪の場合曹操様に会つ事無く斬首。

いや、でも「」で何とか私の事を認めさせれば、私が考えた通りになるんじや？

「荀？」

「は、はい」

いきなり名を呼ばれ、強張りながら返事を返す。

「とりあえず、その書簡を渡してくれるか？ 結構急ぎなんでな」

「あ、申し訳ありません！」

急いで抱えていた書簡を曹丕様に手渡す。

曹丕様はそれを受け取り、内容に目を通す。

その顔がどんどん険しくなつていくが、それは計算のついただ。

読み終わった曹不様が顔を上げる。

さあ、どうくる？

華景 side

これはまた、面白いなあ。

何が面白いって、頬んどいた糧食が半分しか用意されていない。どう考へてもこれはわざとだよなあ。なかなか面白いとは思つていたが、まさかここまで面白い子だとは思わなかつた。

俺、そんなに舐められてるのか。

読み終えて顔を上げると、ちょうど賢姉と夏候姉妹が城壁に上がつてきた。

「華景様、何かあつたのですか？」

春蘭が控えめに尋ねてきた。

それに笑顔で頷くと、賢姉に書簡を手渡す。

「これは？」

「なかなか愉快な糧食の帳簿だ。ここまで面白いのは久しぶりな気がする」

俺の不可解な言葉と笑顔に首を傾げながら賢姉も書簡に目を落と

す。

読み進めるうちに俺の言葉の意味を理解したりしつゝ、顔を上げたときには賢姉も俺と同じ笑顔だった。

「で、これの監督面はどうしているのかしりべ。」

「ここの子だよ」

言いながら荀？の背を押して賢姉の前に立たせる。荀？はすぐに臣下の礼をとつて賢姉の前に跪いた。

「そう。貴方がこれを？」

「はい。」

十分な量は準備したつもりですが、何か不備がありましたでしょうか？」

「十分？ これがか？」

いやいや、不備ありすぎて問題なんだが？

「どこのが十分な量なのかしら・・・？」
指定した量の半分しか用意できていらないじゃないの！」

賢姉がそういうと、後ろで夏候姉妹がそういうこととかと納得したよとに頷いた。

「ここのまま出陣していたら糧食不足で行き倒れるとこりだつたわ。
そなつたら、貴方はどうやって責任をとるつもり？」

「いえ、そなつはないはずです」

自信ありげにそつ言い切つて賢姉を見る苟?。何を根拠にそつ言つてこゐるやひ。

「ほう。それは何故かしら?」

賢姉の目が光る。

「三つ、理由があります。お聞きいただますか?」

「いいでしょ。それが納得のいくものなら今回の事は不問にしてあげるわ」

納得いかなければ処罰する。

賢姉がしなければ、俺が。

「」納得いただけなれば、それは私の不能がいたす所。この場で我が首、刎ねていただいて結構でござります」

・・・・・なるほど。それほどの覚悟を持つて望むか。これは何を言うのか見物だな。

「・・・・・一言は無いぞ?」

「はつ。では、説明させて頂きますが」

苟?が一拍いれる間に、賢姉達の隣に立ち位置を変える。聞くなら正面から聞いたほうが面白い。

「まず一つ曰。

曹操様はとても慎重なお方ですから、糧食の最終確認は必ず「自分でなさいます。

そこで問題があれば「いつして責任者を呼び出すはず。 ですので行き倒れにはなりません」

「いつ・・・・・！」

反射的に大鎌に手を添えるが、それよりも早く賢姉が激怒していた。

「なつ！ ば、馬鹿にしてるのー？ 春蘭ー！」

「はつー！」

そこではつと想い返し、慌てて賢姉を止めにかかる。

「賢姉待つた！ 後一つ、理由が残ってる。首を落とすのはその後だ

ここで首を刎ねたら約定を破ることになる。
それはまずい。

「華景様の言つとおりです、華琳様。それに先ほどのお約束は…
俺と秋蘭の言葉に賢姉は振り上げかけた大鎌を止め、少ししてから短く息を吐いて力を抜く。

「

「…・・・・・ そだつたわね。で、次の理由は？」

「はつ。一ひとつは、糧食が少なくなれば輸送部隊が身軽になり、行

軍の速度も上がります。

その結果、討伐行全体にかかる時間が大幅に短縮できるでしょう

確かにその通りだ。

糧食が少なければ、行軍速度は『上がる』

「んん？　・・・なあ、秋蘭」

「どうした、姉者？　何かあつたか？」

「行軍が早くなっても、賊の討伐自体が短くなることはないよな？」
「ああ、ならないぞ」

「そうだよなー。よかつたあ。私の頭が悪くなつたのかと思つたぞ」

「そうか。良かつたな、姉者」

「うむー！」

春蘭の言つとおり。

いくら早く動けようが、討伐にかかる時間は変わらない。

そもそも行軍速度が上がると言つても、そこまで劇的な変化があるはずもない。

せいぜいが一割増し、良くとも二割が闇の山だ。
それをどう縮めるつもりだ？

「まいい。それで、最後の理由は？」

「はい。・・・三つ目の理由は、私が提案する策を用いれば、

賊の討伐にかかる時間はさらに短縮できるでしょう。
よつて、この量の糧食で十分だと判断いたしました

…………はあ。せうせう。

「曹操様…どうか」この荀？めを、曹操様を勝利に導く軍師として麾下にお加え下せよませ…」

なるほどなるほど。

こいつ、最初から…うこううつもりだったわけか。
本当にいい根性してやがる。

「…………華景。」の子、確かに面白いわね

「だろ？ 言つた俺もびっくりしてる」

熱い決意を胸に願い出る荀？と、それに驚く夏候姉妹をよそに俺達は互いに笑いあう。

お互に考えていることは同じようだ。

「荀？ とこつたかしら。貴方、真名は？」

「はつ。桂花に」やこます」

「そう。桂花、貴方、私を試したわね」

「はい」

なんともすんなりと認めた。

これには流石に怒りを通り越して感嘆してしまう。

だが、うちの將軍には逆効果だぞ。

「何い？ 貴様、いけしゃあしゃあと・・・・！
華琳様一このよつな無礼者、すぐに首を落とすべきです！」

案の定吠え出す春蘭だが、桂花はそれに臆する事無く言つ返す。

「あんたは黙つてなさい！」

私の運命を決めていいのは曹操様だけよー！」

おうおひ、言つねえ。切れてる春蘭に向かつて、大した度胸だ。
それとも、今は賢姉しか見えていないのか。それはそれで問題だ
な。

「あ、貴様あーーー！」

さらに怒り出して大剣を抜こうとする春蘭の肩を抑える。
今此処で暴走されたら、賢姉がやろひとしていることの邪魔にな
る。

それは面白くない。

「春蘭、落ち着け。全ては賢姉次第だ」

「ぐつ、うう・・・・華景様が、そう仰るなら」

顔を歪めながらも、春蘭は素直に大剣から手を放した。
それを確認して、賢姉は桂花に話しかける。

「桂花。軍師としての経験はある？」

「ほ。こに来る以前は、南皮で軍師をしておりました」

「…………そ」

「南皮つていうと……あ、麗羽のとこか。
あれだったら出て行きたくなるな、確かに。」

「どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きせしなかったので
しょう。」

それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたのかしら？」

「……まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。
まして仕える主が天を取る器であるならば、その為に己が力を振
るつこと、何を惜しみ、躊躇う事がありまじよ！」

「……ならばその力、私のために振るつことは惜しまないこと？」

「ひと目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信いたしました。
もし」「不用とあらば、この苟？、生きてこの場を去る氣はありません。
せん。」

遠慮なく、この場でお切り捨てくださいませー。」

それを聞いて、俺は喉の奥でクツクツと小さく笑った。
賢姉が好きそうな性格してる。

「いい人材を見つけてきたな、秋蘭」

「我ながらそう思います」

賢姉は無言のまま、手に持つ大鎌の切つ先を桂花に向けた。その顔はうつすらと笑っている。楽しんでるなあ。

「……桂花。私がこの世でもつとも腹立たしく思うこと、それは人に試されることよ。

分かっているかしら？」

「はい。そこをあえて試させて頂きました」

賢姉の手に力が込められる。

「そう。……なら、いつする」とも貴方の掌の上ということね

一瞬力を抜いたかと思うと、次の瞬間には大鎌を振り上げ、桂花に向かつて躊躇せずに振り下ろした。

大鎌が風を切り、はらりと桂花の前髪が少しだけ舞い落ちる。

「……やつぱ、そうするよな」

大鎌の切つ先は寸分の狂いも無く、桂花の首の前で静止していた。後少しでも動かしたら桂花はお陀仏だつただろう。

「当然よ。……でも桂花、もし私が本当に振り下ろしていたら、どうしていた?」

「その時はそれが天命と受け入れておりました。

天を取る器に看取られることは誇りこそすれ、恨むことなどありません」

口達者なのは、考え方だな。

軍師つてのは特に。

「嘘は嫌いよ。本当のことをおっしゃいなさい」

「曹操様の『』気性からして、試されたなら、必ず試し返すに違いないと思いましたので。

避ける気など毛頭ありませんでした。・・・それに私は軍師であつて武官ではありません。

あの状態から曹操様の一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした

た

「そりゃ・・・」

小さく呟いた賢姉が、桂花に突き付けていた大鎌をゆっくり下ろす。

「・・・ふふつ、あははははー。」

「か、華琳様・・・？」

突然笑い出した賢姉に夏候姉妹が戸惑うが、それにはお構いなしに賢姉は言葉を紡いだ。

「最高よ、桂花。私を一度も試す度胸とその智謀、気に入ったわ。あなたの才、私が天下を取るために存分に使わせてもらひ事にする。いいわね？」

「はっ！」

「ならまづは、この討伐行を成功させてしませなさい。
糧食はこれで十分と言つたのだから、もし不足したならその失態、
身をもつて償つてもらつわよ？」

「御意…」

さあて、これからは楽になるといいがな。

一話（後書き）

長い！ 我ながら長い！
そして桂花がどことなく小心者に？
すいません、これが私の限界でした・・・・・・・・・。

話題（前書き）

前の話が長すぎたから今回は短めにします。

かくして、新しい軍師を迎えた我らが曹操軍は、意氣揚々と出陣した。

いや、意氣揚々つてのは言葉が悪いか。肅々と厳格に、だな。

晴天の下、俺は先頭だって馬を進ませる。

一応これでも賢姉の弟で武官筆頭だからな。俺が先頭にいることとで士気が高まることがある。

ちなみに賢姉は軍の中程に桂花と、その護衛と言つ形でそばに秋蘭もいる。

春蘭は俺の隣で若干不機嫌そうに不貞腐れている。
大方、賢姉の傍にいるのが桂花だから不服なのだろう。

「そう怒るなよ、春蘭。今回は仕方ないだろ？」

「むう。ですが、何故新参者のあやつが華琳様のお傍に・・・」

「昨日あれだけ相手をしてもらつただろうが。今はあれで満足しきなさい」

「それとこれは話は別です！」

先刻からずつとこんな調子で拗ねるもんだから、とてもじやないが手に負えない。

賢姉か秋蘭がいればどうにかなるのかも知れんが、それは無いものねだりといつづつか。

「華琳様の決定ですからあやつが軍師となるのは仕方ないとは思いますが、あの泥棒猫が華琳様のお傍にいることには納得できません！」

「いや、納得する訳々の話ではなくてだな・・・」

「あやつが来てからとこうもの、華琳様の『龍愛を受ける機会』がめっきり減ったのですよ！？」

何かにつけては出し抜かれてしまって、あやつばかりが

「

あー、誰か来てくんねえかな。
なんか勝手に白熱してすゞここといつてるんだが。

一人で盛り上がっている春蘭から田を逸らして空を見上げる。

天気いいなあ。雲一つない晴天つてのはほこひつのを言つんだろう
うなあ。

あ、蝶々。

「姉者、華景様。華琳様がお呼びです　どうかなさいました
か？」

「・・・あ？　秋蘭か。いや、天気いいなあつてな。すぐ行く

空を仰ぎ見る俺を心配そうに見る秋蘭に適当な返事を返し、一人でしゃべり続ける春蘭を連れて、俺は賢姉の下に向かつて後退していった。

「曹不様と夏候惇に、偵察部隊を率いて先行していただきたいのです」

本陣に着くと、軍議の場でいきなり桂花にそんな事を言われた。もう少し順を追つて説明してもらいたいものだが、なんとなく言いたいことは分かる。

「一応聞くが、何の話だ？」

「先ほど先行していた偵察から報告がありまして、前方数里ほどの地点に旗のない集団を発見いたしました。

報告を聞く限りではおそらく野盜か山賊の類と思われます」

「で、とうあえず様子見の意味でもう一度偵察隊を向かわせよつと思つただけれど」

桂花の言葉を途中から賢姉が続ける。

軍議の前に報告が来て、二人で話し合つたのか。
それから軍議を開いて確認しているらしい。

「それで俺達か」

ふむ。俺としては特に文句もない。

強いて言つなら、よくもいきなり俺を顎で使いやがる、くらいだ。

だがそこで、正気に戻っていた春蘭が食つて掛かつた。

「ちよつと待て！ 何故ここで華景様が行かねばならんのだ！ 偵察だけならば私だけで十分だろう！」

まあ、確かに俺じゃなくてもいいんだがね。
ただ春蘭だけじゃあ不安なのも確かだわな。

「あんた馬鹿！？ ちゃんと状況判断が出来て、的確な指揮が出来る人が行かないと偵察の意味がないでしょう！」

追記するなら、それが出来る武官は俺の他には秋蘭のみ。こんなことに賢姉は駆り出せないし。

春蘭？いや、春蘭は・・・・ねえ？

「ぐつ・・・・・！ それでは私が馬鹿のようではないか！」

言わない・・・・。俺は言わないぞ・・・・・。お前は馬鹿
だとは・・・・!

堪えているのは皆同じらしく、天幕の中を一瞬、静寂が支配する
空間と化した。

•
•
•
•
•
•
•
•
•

• • • • • • •

• • • • • • •

「な、何故そこで黙るのですか！」

「……春蘭。人には耐えねばならん時があるのだよ。

「……まあ、とりあえず俺と春蘭が行けばいいんだな」

「はい」

「お願いするわね、華景」

「了解

秋蘭に宥められる春蘭を横目に、軍議は終了した。

すまん、春蘭。また今度、賢姉に相手してもうひとつ交渉するから。

一話（後書き）

春蘭の扱いが若干不憫な気がしますが、原作もこんなもんだつた気がします。

やりすぎだつたらすいません。

続・一話（前書き）

三点リーダーを使ってみました
変だったら教えて下さい

そんなこんなで先遣隊を率いて道を急ぐ俺と春蘭。

戦は乐じやないのは分かっているが、まさかこうも早々と仕事が回ってくるとは思わなかつた。我らが軍師殿の神經の図太さにはほどほど感心せざるを得ないな。まるで俺に恨みでもあるんじやないかと勘繰りたくなるほどに。愚痴を言つても仕方ないのも分かつているが、どうにも桂花が俺を見るときの目に敵意を感じてしまう。いや、敵意というか、殺意？ よく分からぬが目を合わせるたびに睨まれているような気がするんだよなあ。すぐに逸らされるし。

「…………なあ、春蘭」

「はい？」

「俺、先が思いやられるわ」

「は、はあ…………？」

俺の突然の言葉に疑問符を飛ばしながら首を傾げる春蘭。

何のことか伝わっていないが、説明するのも億劫なのでそのまま進んでいく。

これ以上後ろ向きな気分になる前にひとと仕事を終わらせて帰らひ。

報告があつた辺りに到着すると、そこからさらに先のほうに確かにそれらしき集団が居るのが見える。数にして大体数十人くらいの、いかにも野盗といった連中が何かを囲んでいるようだ。そして、その中心辺りで人が物理的に昇天している。新しい宗教の儀式だろうか？また物騒な儀式をする連中もいたものだ。

そんなどうでもいいことを考えながらさらに距離を詰めていくと、どうやら連中は小さな女の子を囲んでいるようだ。先ほどから上がっていた人間花火はその子が一人で行っていたらしい。というかあの子、なんつう馬鹿でかい鉄球振り回してんだ？

「子どもが戦ってるな」

自分でも驚くほど冷静に、田の前の事を呟く。

「な！ 何ですとー？ 早く助けましょー！」

いや、行くつもりなんだが。

と春蘭に言う間もなく、彼女は颯爽と？　いや、猛然と賊共に向かつて突撃していった。

春蘭。お前はそんなだから馬鹿にされたり猪呼ばわりされるんだぞ？

「あの…曹丕様、我々はどうすれば？」

見事に置いてけぼりを食らつた後ろの部隊の一人が、戸惑いながら俺に聞いてくる。

どうつて、あれを追いかけるに決まつてゐるだろ？

「誰か曹操様に報告に行け。それから何人か賊を泳がせるから、後を追う者を数人置いていく。
それ以外はあれを追いかけるぞ」

あれ、と親指で春蘭を指し、返事を返す兵達と共に走り出す。

賊が束になつて宙を舞つ。俺が行かなくともよくないか？

「まだまだあ！……！」

「でえええい！……！」

掛け声をかけながらどんどん敵を吹き飛ばしていく春蘭と少女。どうみてもやり過ぎだろう。吹っ飛んで粉々になつてる奴とかいるし。血の雨つて本当に降るんだな。

ただでさえ一人の怪力に薙ぎ倒されていた賊たちは、俺達が到着したことによりもともと無いに等しかった士気がさらに落ち、一人、二人と逃走を始めだした。これで後は追跡させて本拠地を探り出せばいいだけだ。……俺の仕事、無かつたなあ。別にいいけどさあ、こう、武官として、ねえ？

「待てい！ 逃がしあせんぞ！……！」

「お前が待てい」

さらなる暴走を始める前に春蘭の襟を引っつかんで無理やり押し

止める。

「何故止めるのですか！？」

「あいつは本拠地まで案内してもいいんだから、我慢しなさい」

「？……おお、なるほど。おおこー、誰があるー。」

「わかったらわかるからな？」

おお、春蘭よ。お前の愛すべき馬鹿を加減が切なくなつてへるだ。などと一人でじやれ合つてゐると、少女が遠慮がちに声を掛けた。

「あの、助けて頂いてありがとうございましたー。」

髪を二つに分けて括つている活潑そうな少女は、そつこつて勢いよく頭を下げた。

礼儀正しい子だなあ。将来子どもが出来たときまつり育つて欲しいものだ。でも鉄球を振り回すほどやんちゃなのは勘弁。いや、そもそも相手がいないだよ。

「おおー！ 怪我はないか？ 勇敢な少女よ

「あ、はーー 大丈夫ですー！」

仲が良さそうに笑いあつ一人は、性格の似通つた姉妹のように見えなくも無い。

「どうか、春蘭がちゃんと姉に見える！不思議！」

「それはさておき、何でまた一人で戦つてたんだ？ これは勇敢と言つよりも奮勇だぞ」

確かに一人で賊と戦つのは勇気ある行動だろう。だが、それで殺されでは元も子もない。

言い方は悪くなるが、勝てなければどれほど強かろうと無意味なのだから。

「それは……」

言ひ咎める俺に、気まずそうに話しうわとしたといひで、ちようど後方から賢姉率いる本隊が到着した。
まるで俺達の事を見ていたかのように。

それに春蘭が手を振つてゐると、少女の表情がさつきまでの嬉しそうな顔から一変して驚きと怒りに変わつたように見えた。
いや、怒りかどうかは分からぬが、そんな風に見えた。

「報告は聞いたわ。ご苦労だつたわね、春蘭、華景」

「俺はなんもしてないけどねえ。全て春蘭との子がやつてくれたよ」

いや本当に。俺つてば要らない子だったよ。

「もしかしてお姉さん達、國の軍隊…………！」

「ん？ まあそなだが…………！」

春蘭が答えた途端、少女が春蘭に向かつて鉄球を振っていた。
寸でのところで反応できた春蘭は迫り来る鉄球を弾く。そしてそれはそのまま俺の方へ

華琳 siide

とつさに春蘭が弾いた鉄球が、ぼうつと立つていた華景に向かつていいく。

突然の事に呆気にとられていた私はそこではつと我に帰り、未だにぎさつとしている愚弟に叫んだ。

「華景！ 前を見なさい！」

鉄球が目前に迫つてきて、よつやく華景は動き出した。

ギリギリまで来た鉄球を大きな音を立てながら思い切り蹴り上げ、それに少女が気をとられている間に素早く肉薄する。

それに反応し切れなかつた少女の背後に回り込むと、少女の腕を捻り上げて首に大鎌の刃をあてがつた。

少女は武器を落とし、地面に倒される。

「あう！」

「……で、この子殺していいのか？」

普段とは違う、酷く平坦で感情がこめられていない声で、少女を睨むでもなく見下ろす。

対する少女は身動きできず、ただ華景と私達を睨んでいた。

「待ちなさい、華景。まだこの子には聞きたい事があるのよ

放つておくと本気で殺してしまひ。

華景に待つたをかけ、押さえている少女を解放させる。

華景は少女を放しはするが、鋭い目線だけは決して離さず少女の背後に立つたままだ。

手にしている大鎌も何かあればすぐに首を刈り取れるように構えている。

華景が、少女を敵と認識してしまったようだ。
これは少し急いだほうがいいわね……。

「貴方、名前は？」

「……許緒」

「では許緒。何故いきなり攻撃してきたの？」

私が問いかけると、許緒は先ほどよりもさらに厳しい目で私を睨む。

「役人なんか信用できるもんか！ ボク達を守ってくれないくせに税金ばっかり持つていいて！！」

それは盜賊から守つてもらえたかった民の総意。

統治者として民にいつもとも言わせたくない言葉。

許緒はそれを力の限り私に叩きつけてくる。

「ボク達がどれだけがんばって育てても全部役人が持っていく！
何もしてくれないくせに！」

賊が来ても、病気が流行つても、何も！だからボクがみんなを守
るんだ！」

「ボクがみんなを盗賊からも……役人からも守るんだ！！」

「この子はきっと、こんな事を言つた後に処断されてしまう」とも
分かっている。

それでもなお、言わずにはいられない。それほどまでに、民は追
い詰められている。

少女の絶叫を聞く皆の顔が歪んでいた。

華景の鎌がピクリと動く。

攻撃の意思はなく、華景は構えていた大鎌をゆっくりと下ろして
私を見た。

「…………そう。許緒、「めんなさい」

私は激昂する許緒に、身分など氣にもせずに深々と頭を下げた。
ここは私が治める領地ではない。だとしても、同じ為政者として
謝りたかった。

この国の民である許緒に、この国の為政者として。

「曹操、様……？」

「華琳様……」

「何と……」

「え？ あの……！」

頭を上げ、予想外の事に一人慌てる許緒に改めて向き直る。

「そういえばまだ名乗っていなかつたわね。私は曹操。山向いの街で、刺史をしているものよ」

「山向いの……あつそれじやつ！？」

私が名乗ると、今度は許緒が深々と頭を下げる。

「山向いの街の噂はよく聞いています！
向こうの刺史様はすごく立派な人で、悪いことはしないし、税金も安くなつたし、盜賊もすごく少なくなつたつて！
そんな人に、ボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは、わたし達が一番よく知っているもの。

『官』と聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ」

「で、でも……」

まだ気まずそうにする許緒に首を振る。
この子が謝る必要はどこにもないのだから。

「だから許緒。あなたの勇氣と力、この曹操に貸してくれないか
しら？」

「え……？ ボクの力を……？」

「私はいざれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりに少なすぎるわ。

だから……村の皆を守るために振るつたあなたの力と勇気を、この私に貸して欲しい」

「華琳さまが、王に……？」

「ええ」

支配者ではない、為政者として。

帝ではなく、王として。

戦をするためではなく、戦を終わらせるために。

「あ、あの、曹操様が王様になつたら……ボク達の村も守つてくれますか？」

盗賊もやつづけてくれますか？」

「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでもなく……。

「この大陸の皆が平和に暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「この大陸の……みんなが……」

私の言葉をかみ締めるようにつづくと、許緒は繰り返した。

続・一話（後書き）

もつ今日は思いついたネタをじつはって本編にねじ込もうかとばかり考えていました。

ああ……早くあのキャラのところまで進めたい……！

三話（前書き）

短く分けすぎかな?
まあ、いいか。

賢姉と会話し、その思いに触れた許緒
我らが曹操軍の一員となることを決意。

早速、今回の賊討伐に従軍する事となつた。そのお陰で軍はよにぎ
やかになつたもんだ。

主に春蘭と季衣が仲良く大声で笑いあつたりしてゐからだが。

俺としては誤解とはいえ武器を向けてきた輩を素直に信用してよ
いものかと思いはするが、あの状況なら仕方なかつたのだと割り切
ることにした。

いくら季衣が凄まじい武をもつてているとしてもまだ子ども。
これからしっかりと教育していけば問題なかろうと結論付けた。
それよりも問題なのは……。

「兄ちゃん！　曹操様が呼んでるよ」

「……季衣。兄ちゃんはやめてくれ。俺は弟であつて兄じゃない」

季衣が無邪気に俺の事を兄ちゃんと呼んでくることだ。俺にわざ
わざ謝りに来たときから。

今まで年下の知り合いやら部下をあまり持つたことがないから、
兄ちゃんといわれると激しい違和感しかない。

注意もこれで十回目。そして注意するたびに決まって

「こや？ 兄ちゃんは兄ちゃんでしょ？」

と返されたからびしきようもない。

だが！俺は！諦めない！いつの日か、必ず兄ちやんと呼ぶのを止めさせてみせる！

無駄に固く心に誓つた俺は、季衣と共に賢姉が待つ天幕に向かつた。

「全員揃つたわね。では、始めましょ！」

賢姉の言葉で、恐らく今回の賊討伐では最後になる軍議が始まる。

「ではまあ、いからいの地図をいじ覽みとこ」

桂花が何処からか取り出した地図を机に広げる。

この地図は……賊の根城と化している砦とその周辺の見取り図か。

ちなみに、俺達は今その砦の見える位置に布陣している。

明日には戦闘が始まると。そのために作戦を立てているのである。

「見る限り、かなり堅牢な砦だな」

秋蘭が地図を覗き込みながら言つ。

背後は絶壁。門の造りも頑丈そうだ。

これを普通に攻略しようとするならばそれなりの攻城兵器が必要になる。

それをしないための策だが。

「季衣。」この辺りに他に盗賊団はいるかしら？」

「いえ、この辺りには他にいなはずですから、華琳様が探している盗賊団はこいつらだと思います」

「そう。敵の数は把握できてるの？」

「はつ。偵察にいかせた者の報告では、三十強との事です」

「ふうむ。こっちが千と少しだから、ざつと三倍つてとこか」

これだけ聞くと、絶望的な状況だな。

堅牢な砦に引きこもる三倍の敵。

唯一の救いは、敵が賊でなくして訓練を積んでいない鳥合の衆ということが。

「いくら数を揃えようと、所詮は雑兵の集まり。

将ビジコロが命令系統もうろくに整っていない者共に遅ればとしません」

「ええ、そうね。けれど何か策があるのでしょう？ 桂花。糧食の件、忘れていないわよ」

「はつ。兵の損害を抑え、かつ討伐時間を短縮するための策、既に我が胸の内に」

その無い胸の内によく収まつたな、とか言わない。
……そんなに睨むなよ、照れるじゃないか。

「説明なさい」

「……は？」

賢姉に促されて、桂花は俺から目を逸らして作戦を語り始めた。

「まず、曹操様と曹丕様は少數の部隊を率いて皆の前に展開していただきます。

その間に夏侯惇・夏侯淵の両名は後方の崖に残りの兵を伏せて待機。

その後、本隊が盛大に銅鑼を鳴らして攻撃することを匂わせれば賊共は必ず皆から出できます。

お一人は兵を後退させ、賊共が全て皆から出たところで……」

「私と姉者が後方から打つて出る、と」

「ええ」

「なるほど。皆から敵さんを釣り出すわけか。

そして、その釣り針は賢姉。網は春蘭と秋蘭」

そこまで話したところで、黙っていた春蘭が声を上げた。

「…………ちょっと待て。それはなんだ、華琳様を囮にするといふ事か！？」

さつきからさつきひ言ひてるじゃないか。

「そうなるな」

「何か問題が？」

「大ありだ！ 華琳様にそんな危険なことをさせられるわけがない！」

うんうん。

万が一にも賢姉が死んでしまうことがあつたら元も子もないからな。

でもな、春蘭。

「お前の言いたいことはよく分かる。

つまり、俺はそんなに信用されてないってことだよな？」

俺と賢姉が一緒にいるのは、俺が賢姉の護衛に着くつてことだ。それに季衣の名が出なかつたことから季衣も護衛に着くはず。俺と季衣がいるのにそんな事を言うなんて、俺は悲しいぞ。

「え！？ いえ、そのような事は決して！ ただいくら華景様と季衣がいても危険な事に変わりは」

「おい季衣。俺達は春蘭に信用されてないらしいぞ」

「え？ そつなんですか？」

季衣も巻き込んで春蘭をからかいにかかる。が、それは流石に秋蘭が間に入つてとめられた。

「華景様。あまり姉者をいじめないで下さい。
姉者も、華景様達なら大丈夫だ。必ず華琳様を守つてください」

「へ、ひむ……」

「悪こ悪こ

「冗談はこれくらいにして。

「だ、だが、そんなことをしなくても相手が鳥合の衆ならば正面から叩き潰せばよからへ」

……しておきたかつたなあ。

春蘭。君は実に……いや、よむへ。これでこそ春蘭だ。

「こちらが寡兵で、しかも後退すれば敵は油断する。そこに伏兵が現れれば、敵は大きく混乱するわ。そうなれば、鳥合の衆をより迅速に、尙且つ最小の被害で倒すことが出来るのよ。

今この現状では最良の策だと思つただけれど?」

「な、なれば敵がこちらの誘いに乗らなければ?」

「…………ふつ」

うわあ、鼻で笑つたよこの子。完璧に馬鹿にじてゐよこの子。素敵な性格してんな。憧れるぜ。

「なー、なんだその馬鹿にしたよつな田中……ー。」

「曹操様。相手は志を持たず、武を役立てるともせず、賊に身をやつすよつと単純な者共です。」

間違いなく、夏侯惇殿よりも容易く挑発に乗ってくれるものかと

- 1 -

あーあー、春蘭が完全に切れた。

ほほこせんせん。貴方の負けよ、春蘭！」

「華琳様あ

「でも春蘭の懸念ももつともよ。次善の策はあるのでしょうかね？」

「勿論です。そのために」の地図をお見せいたしました。

砦を内側から破ります」

桂花が背後の崖に面した一角を指し、次善の策を説明していく。

まあ、俺らが無い頭捻つて考えるよりも良作なのは確かか。
後は想定外の事になつた場合の対処は……現場の判断だよな。

「そうね。では、この策でいきましょう」

「華琳樣！」

「春蘭。これだけ勝てる要素が揃っているのに何一つ出来なくて、これから霸道を歩むことなんて出来はしないわ」

我らが賢姉はいつも自分を追い込むのが好きなんじゃなか
るつかと思う。

自分から進んで困難な道を進んでいくのが。

じついつの、なんて言ったか。……被虐思考？

II 話(後書き)

もつらし……もつらし……。
もつらしだの子に会えるー。
ふ、ふふふ。

でも後五話くらい先かも。

四話（前書き）

案外と誤字が多くて凹むいの頃。
まだあつたりしましたら教えて頂けるとありがたいです。

桂花の献策通り、俺達本隊は少數の精銳部隊を率いて皆の前に展開した。

これから戦となると否心なく心が昂ぶっていくが、そんな心情とは裏腹に顔からは表情が消えていく。

高揚していくにつれて、冷めていくような感覚だ。

完全な無表情の俺の隣に、賢姉が馬を並べた。

賢姉の表情は少し寂しそうで、だが俺は何も言わない。

「華景、無理をしてはダメよ」

賢姉が心配そうにそつ言つてくる。

だがそれは賢姉の方だ。俺よりもずっと無理をしている。

「問題ない」

そう思つても賢姉に指摘する事無く、俺は低い声で短い返答を返すだけだった。

賢姉はそう、と呴くと、それ以上何も言わずに後方に下がつていった。

もうすぐ、殺し合いが始まる。

華景の様子は、良くも悪くも『いつも通り』。

『いつも』の笑顔ではなくなっているが、『いつも』の無表情だ。あれならあの子は死ぬことは無い。……でも、安心は出来ない。あれは枷を外した虎と同じ。いつ暴走してもおかしくない。

あの子には武において天賦の才がある。幼い頃から共に歩んできた私はそれを知っている。

だが同時に、あの子には無慈悲な人殺しの意識が眠っている。戦狂いの様に、殺す事に愉悦を見出している。あの子が戦う姿はそうとしか思えない。

「曹操様？ どうかなさいましたか？」

心配そうな桂花の声にはっと顔を上げる。

いつの間にか桂花と、季衣が私の顔を覗き込んでいた。よほど深刻な顔をしていたらしい。私らしくも無い。

私は一人に、努めて普段と同じように笑った。

「なんでもないわ。それよりも、そろそろ時間よ」

あの子の事は後回しだ。今は目の前の賊に集中する。こんな事では、全体の士気に影響してしまつかもしれない。気をつけなければ。

開戦の銅鑼がなる。

そして砦から飛び出してくる賊共。

「……ねえ、桂花。これも想定の範囲内かしら？」

「……いえ、流石にこれは予想外です」「
でしょうね……。

どうやら奴らはいちいちが鳴らした銅鑼の音を、出陣の合図と勘違
いしたりしい。

いくら賊といえど、これは酷すぎる。本当に数が多いだけなのが
よく分かった。

「でもこれは好機ね。全軍に告ぐ！ 我らは敵の攻撃を受け流し
た後、即時反転、後退する！」

声を張り上げて指示を出し、自身の武器である大鎌【絶】を構え
る。

さあ、来るがいい！

秋蘭 side

崖の上に兵を伏せて待機すること半刻。

銅鑼の音が聞こえ、作戦が開始されたはずが、何故か賊共が砦か

ら続々と出撃していく。

予定ではまだ挑発を行つてゐる最中のはずだが……。

「報告します！　曹操様率いる本隊が後退を始めました！」

「そうか。分かった」

走り去る伝令から田を離すと、慌てた様子の姉者が入れ替わりに駆け寄つてくるのが見えた。

「秋蘭！　本隊が後退を始めるのがやけに早くないか？
……まさか、華琳様の身に何か！？」

声を荒げて今にも飛び出しそうな姉者は可愛いが、今行かれでは策が成らない。

「落ち着け姉者。大方、予想よりも策が順調に進んでゐるのだろう。それに華琳様には、華景様と季衣が護衛に就いているのは覚えているだろ？」

ゆつくり諭すようにして宥める。

「う、うむ……」

華景様の名を聞いて大人しくなった姉者は、皆から出てくる賊に目を向けた。

奴らがあまりにも無防備に突撃していくことは、こちひりとしてはありがたい。

「しかし、これが盗賊団か」

「隊列も何もあつたものではないな」

「」のよつな者共を相手にしても訓練にすらなりはしない。
そういう意味では、今回の討伐は外れだつたか。

「なあ、秋蘭。……突撃してはダメか？」

「ダメだ。まだ敵の殿が出てきていない」

「しかしだな、これほど無防備にされると殴りつけたくなる衝動が
……」

「気持ちは良く分かるが、まだだ。だが、準備はしておくとこよつ

「おひー！ 全軍、突撃準備！ いつでも出られよ！」
おけー！

……姉者に待つたをかけてさらに待つと、よつやく殿が見えた。

「……もう、いいなー？」

「ああ、思いつきり行つてくれ、姉者」

姉者にそういうが早いが、姉者はいつの間にか大剣を引き抜いて
高々と掲げていた。

「全軍、突撃いいいいいいいいいー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

『----- 命運の運命を運んでおる事だ。』

勇ましい号令とそれに応える兵士達の地響きにも似た声を合図に、
私達は敵に向かつて突撃していった。

華景 Side

攻撃をいなしながら本隊が後退していると、敵の後方から怒声が聞こえてきた。

どうやら伏せていた一人が動いたようだ。そのお陰で、前曲に集中していた攻撃が和らぎ、賊が混乱しているのが見えた。

機は熟した。

「全軍、反転！
反撃を開始せよ！」

賢姉の号令を受け、後退していた本隊が反転する。
先ほどから後退していた我らが反撃を始めたことで、賊の混乱は
さらに広がる。

これで、心置きなく殲滅できる。

「賢姉、俺は前に出る」

ここまでくれば、俺が護衛にいる意味はあまりない。季衣だけでも十分にこなせるだろ？

「……ええ、あまり前に出すぎてはダメよ」

賢姉からの承諾を得て、俺は大鎌を引つさげて乱戦の中に突撃した。

乱戦、とは言つたが、実質は我らの精兵が賊徒を刈り取つているだけ。

賊の抵抗などあつてないような脆弱なものでしかない。

「死ねやあああ！」

俺に向かつて振られる剣を体を横に動かして避け、すれ違ひざまに首を刈る。

血飛沫が上がり、倒れる体を無視して、仲間の死を見て固まっている数人の首も同様に刈り取つていく。

分かつてはいたが、弱すぎる。

個々の武が低すぎる。

お前達の命はこんなものか？

飛来する矢を弾き、敵陣の奥へ疾駆する。

その最中でも、俺の近くにいた賊はすべて刈り取り、誰一人として逃しはしない。

奥へ。もつと奥へ。

お前達の喉元はあまりに無防備だぞ。

容易く食い破られるのか？

死力を尽しても、こんなものなのか？

大鎌を薙ぎ、突き、刃の反対側についた鉤爪状の突起で引き裂く。円を描くように大鎌を振り回し、蹂躪していく。

返り血で真紅に染まつた、元は蒼い外套。血が滴り落ちる大鎌【断】。

「まだ、終わってはいないだろ？」

敵陣の奥に辿り着くが、賊たちは既に瓦解する寸前で、逃走を図る者が多数。

四散する賊を見つめながら、ここから先は俺の仕事ではないと判断し、俺は本隊に戻りながら残っている雑魚の掃討を始めた。

血を洗い流す時間が惜しかつたのでそのまま本陣に戻ると、そこに春蘭と季衣の姿が無かつた。

「戻ったぞー」

とりあえず帰還したことを知らせながら天幕に入る。すると、入った途端に賢姉の鋭い視線に晒された。

何故に？

「……華景。何か言つ事は？」

いや、こきなりそり言われてもアタシには心当たりがないのですが。
突撃するときこひやんと許可は取つたぞ。

「何の話か分からんのですが」

「私は、前に出すきてはダメと言つたわよね？」

……んん？　はて？　そんな事を言われただろうか。
覚えが……あるような、ないような。

「言つたわよね？」

「はい言つてましたすこません」

怒る賢姉の迫力に覚えていないとは言えず、条件反射で思わず謝つていた。

もしかしながら、これは懲罰モノか。
命令無視したしなあ。

「で、どうして欲しいかしら？」

懲罰の内容を決めさせてくれるなんて、賢姉は優しいな！

「秋蘭の的になるか、一ヶ月甘いもの禁止か、全裸で城下町一周か、
選ばせてあげる」

こんな懲罰を考えるなんて、賢姉は鬼だな！？

秋蘭の的になつたら穴という穴に矢を突っ込まれる！

一ヶ月も甘味が食えなかつたら俺は干からびる自信がある！
全裸でそんなことしたら羞恥心で死ねる！

選択肢はあるようでないぞ……。

「私としては三つ目を進めるわ」

「俺に死ねとー？」

「私の的になつていただけるのでしたら、多少の手加減はいたしますが」

「前にもやつて全力だつたよな？！ 分かつたよ甘味禁止にするよ！」

ちくしょう……。俺の杏仁豆腐が……。

「さて、それはもういいとして。今は春蘭と季衣が追撃に出ています。
すぐには戻つてこないでじょう」

すぐに頭を切り替えて報告に入る秋蘭。

なるほど。それでいいわけか。

「桂花、今回の策、見事だつたわ。お陰で兵の損失も最低限に抑えられた」

「あ、ありがとうございます！」

顔を赤くしながら返事を返す猫……もとい桂花。
そうしてたら可愛いのになあ。

「問題があつたのは華景のみ。最高の戦果ね」

「申し訳ない」

「もう思ひなひ、もう少し自重なやう。猪ではないのだから」

「善処します」

出来るかは分からぬが。

「それじゃ、春蘭たちが帰還し次第、撤収します。撤収準備を始め
なさい」

「「御意」」

ソラして、賊討伐は終了した。

目前に陳留の街が見える。

一月も離れていなかつたはずだが、随分と懐かしい気がする。
そういえば余談だが、賢姉がついに州牧に着任することと相成つ

た。

前の州牧が賊に恐れをなしてどうぞくと逃げ去つたりしへ、その後を賢姉が引き継いだのだ。

それはいいとして、街が見えた程度では感傷に浸るほどいの事でもないのだが、今はそうしたい気分だ。

なぜなら。

「腹減つたな……」

「本当にね

」「うう……」

結論から言おう。

糧食が空きた。

それはもう完璧に。米粒一つも残さず綺麗とつぱり。

極め付けは、空きたのがまさに陳留の田と鼻の先だったのだ。これには同情せざるを得ない。

「で、ですが、一つ言わせていただけるならば、これは季衣が……

「いや？」

名前を呼ばれて首を傾げる季衣の頭をなでる。
「ふうん、季衣は気にしなくていいぞ。

「育ち盛りだからな、季衣は。あれくらい仕方ないな

そう。仕方ない。

育ち盛りだから十人前を平らげるのも仕方ないんだよな？

「戦場では不可抗力や予測し得ないことが起こるのが常よ。……分かつているわね？」

誰であろうと流石にこれは予測できなことは思つうが、約束は反故に出来ない。

今回ばかりは、桂花の運が無かつたと想つよりない。

「……承知しております。

ですがせめて……最後は夏候惇ではなく、曹操様の手で……！」

「どこまでも賢姉がいいらしい。
いやまあ、別にいいんだけどね。

「とはいえ、今回の桂花の功績も事実。

……いいわ。死刑は減刑して、お仕置きで許してあげる」

「そ、曹操様！ ありがとうござりますーー！」

「それから、季衣共々、私の真名を呼ぶことを許します。
これからもより一層、奮起して仕えなさい」

「は、はいー ありがとうございますー！」

これで正式に猫軍師が参入というわけだ。
それに季衣も参入して、武官も確保できた。
なかなかの成果だ。

そういえば、ついでに探していた太平要術の書は見つからなかつたな。

別段、大きな問題ではないが、もう少し念入りに探させるか……。

四話（後書き）

今日は更新できなかとひやひやしましたが、何とかなりました！

ちなみに、明日は遅らへ出来ません。
色々あるんですね……。

金が飛ぶイベントが。

あのナメでないと……。

休暇？ —（前書き）

書を上げてから、あの子をスルーしていくことに気がついた。

うわあああああ！――！

休暇？ —

賊討伐から二週間。

賢姉が州牧になつて一週間。

俺の甘いもの禁止令が後十日。

正直、辛すぎて仕事に身が入らない。菓子が無いだけでもさかここまで辛いとは思わなかつた。

仕事の後の一口つて最高なんだぜ？ 休日の朝から食べ歩くのは格別なんだぜ？

あれがないと俺の人生の半分を失つたようなもんだわ。

だが仕事は手が抜けるほど余裕があるわけではなく、全力で当たつてしている。

そして終わつたら魂が抜けている。

そんな事がありつつも、賢姉が州牧になつてからよつやく仕事が一段落したらしく、皆で城下町に視察に行くことになつたらしい。

『らしい』というのが、俺はそれを直接は聞いてないからだ。

その場にはいたんだが、禁断症状が出てて聞いてなかつた。後で賢姉に散々絞られたなあ。

それはさておき、俺は今、視察に行くぜと召集をかけられて城門の前で待機している。

既に春蘭も来ているのだが、まだ秋蘭と肝心の賢姉が来ていない。

「春蘭。 賢姉と秋蘭はどうしたんだ？」

「それが、華琳様の髪のまとまりが悪い。……まだお部屋のまつり。秋蘭はその手伝いに行つておつま」

「あ、まあ……流石にそれは、どうじょうもないか。
今日は少しじジメジメしてゐるから、そのせいかね。

ちなみに、季衣は熱を出して寝込んでいたりする。
今朝見舞いに行つたときに聞いた話だと、あまりにも楽しみにしそぎて体調を崩したようだ。

お前は子どもか！ いや子どもだけども。

ちなみに猫……桂花は城に留守番だ。

流石に主要の面子が全て出払うのは問題だからな。
留守番するのは俺でも良かつたんだが、猫よりも俺の方が比較的街に詳しいことから猫が留守番になった。

伊達に甘味処を探して街中を練り歩いてはいけないわけよ。

「まるで仕事をさぼつてまで街に行つてゐるかのよひですね」

「いやいや、猫殿ほどではあらんせん」

……ん？ 今俺、心の中で誰かと話したか？

「華景様。その猫とは、誰の事ですか？」

「……おお、いたのかミケ」

「誰がミケですか！」

全然気づかなかつたが、俺の脇にいつの間にやら桂花が青筋立て立つていた。

その様はまさしく威嚇する猫の如し。…これ前も言つたつけか？

「そうカリカリするなよ。毛並みが悪くなるぞ、トラ」

「私の名前は桂花です！ ミケでもトラでも猫でもありません！」

「分かつた分かつた。俺が悪かつた、ケイちゃん」

「ですから！ あ～もう！」

桂花が怒鳴るたびに別の愛称を考えてはそれで呼んでみるが、どれもお気に召さないらしい。

まつたく、贅沢なことだ。

「ほら、いつした愛称の方が親しみやすいだろ？ ケイちゃんだったら俺とお揃いだ」

「親しみにくくて結構です！ それに華景様とお揃いでも嬉しくありません！」

「賢姉だったりリンちゃんだから、ケイちゃんはお揃いには出来ないぞ？」

調子に乗つて桂花をからかつていると、突然頭部に痛烈な痛みが走つた。

何か鋭いもので突かれたような、一点に集中した痛みだ。

それに耐えかねて思わずうずくまるが、さらに背中を蹴られた。

「どわつー。」

奇襲に次ぐ奇襲に、俺は耐えかねて前のめりにこける。

「痛うー」

「誰がリンちゃんよ、誰が」

頭を押されて唸ると、頭上からわざわざまで唇なかつた賢姉の声が聞こえた。

声色からして、若干お怒りの様子。

とりあえず立ち上がり、賢姉と田を合わせなによつに向かって呟く。

「畏怖されるより親しまれるほうが何かと都合がいいだろ?」

「そうね。だつたら今日から華景の事は『犬』と呼ぶことにするわ。そのほつが親しみやすいものね?」

「わづなると『賢姉』が『犬姉』になるな

挨拶代わりに『冗談を交わして、皆が笑う。

そういうえば、じつして賢姉と『冗談を言つるのは随分と久しぶりな気もする。

——数ヶ月は忙しかつたからか、氣を張り詰めていてこんな『冗談』を言つ余裕もなかつたということか。

「待たせたわね。では、行きましょうか。

留守は任せたわよ、桂花

「……はい。お任せ下さー

やはり不服そうではあるが、猫には今回は我慢してもいいやつ。
季衣と一緒に何か土産でも買つてくれるか。

「じゃあ、行くか

城下町に着くと、そこはいつもと変わらぬ民の活気に溢れていた。
市が開かれているのか大通りに人が多かったり、商店や飯店も客
の出入りが盛んで随分と賑わっている。

「今日はまた随分な賑わいだな。祭りでもしてゐみたいだ」

「良いことではないですか

「まあ、そうだな。……なんだありやあ

秋蘭に返事を返して周りを見ていると、大通りの一角で、歌つて
踊る二人組の少女の姿があつた。

「旅芸人ね。この辺りでは珍しい

「あまり、聞き慣れない歌ですね

「遠方から流れてきたのでしょうか。それだけ治安が良くなってきたということよ」

賊の数が減り、安全に旅が出来る様になつた証拠があの旅芸人と
いうわけだ。

これなら行商もまだまだ集まつてくるだろつし、それに伴つて俺
達の国庫も潤うな。

それはいいとして。

「あの子達、ちと物足りない気がするな

ちゃんと声量訓練はやつしているのか？ とか、ちゃんと体は鍛え
てるのか？ とか。

この人波の中ではむつと声を出さないと聞こえなくないか？

「確かに腕は一流ね。まだ駆け出しなんでしょう

ふむ。まあ、頑張れ三姉妹。
これからきっと良い事もあるさね。

街の中央広場に着いた。

特に何も説明できる物はない。ただの広場だ。

「さて、あまり時間も無いしね」からは手分けして見て回りましょ
う。

北側はもつ見たから、春蘭は西側。秋蘭は東側。私は南側になるわね」

「そして俺は北側だな」

「……貴方はそんなにお仕置きして欲しいのかしらね？」

「冗談ですよほつまつば」

「まつたく……華景は私と同じ南側よ。逃げなにようじつかり見守つてあげるから感謝しなむ」

わーい嬉しいなー（棒）

「くつ！ 華景様がうひやましいです！」

春蘭や、代わってくれても、いいんぢゃよ？
ソレは無理だと分かっているが。

「さつさも言つたけれど、時間はあまり無いのだから少し懶をましよつ。

一刻後、またここに集合よ」

「「御意」」

解散して南側に向かつて歩く俺達。

南側は鍛冶屋が多かつたはず。日がな一日中、金属を打つ音が響いている。

それを聞いているとだんだんと眠くなる。

「華景は、」の辺りには来るの?..

「たまにだが。鎌の手入れやら鎧の修繕せひする時に来るべういだ。賢姉もだろ?..」

「私はそもそもあまり出かける時間がないのよ」

そりゃ「」もつとも。

休憩時間すら書簡から田を離せうといのせびつよ。

「こりひしゃーーー 竹籠ビヒリですかーー..」

道の脇で威勢よく竹籠を売る声が聞こえる。
そちらに田を向け……。

「……奇抜な格好してんな。今時の若いのは」

あれはもはや下着じやないのか?
腰に着けてるのは……工具入れ?

「貴方も十分に若いでしょ?」

思わず釘付けになってしまった俺に気づいた少女が笑顔で手招きしていく。

「……あれ、呼んでるよな」

「呼ばれてるわよ。行つてあげなやー」

いや、流石にあれに近づくのは勇気がいるや。変人に見えるとかじやなく、周りからの目が痛くて。

恐る恐る近づこうと、少女は満面の笑みで迎えてくれた。

「お兄さんええとこに来はつたわあ！ どないです？ 竹籠お一つ

間に合つてます。本当にいいです。他を貰たつて下せご。

などと、笑顔の少女相手に言えるほどのが根性がない俺は何かないかと視線を巡らせる。

何か……何かないのか！？

そこでふと、少女の脇においてあるよく分からぬ絡繆が田に留まつた。

「なあ、これは？」

「うん？ ああ、これですか。これは全自动竹籠編み機ですわ。これ作るの苦労しましてん！ まずは型作りから初めて

「

絡繆の事について熱く語りだす少女。
材料集めに苦労しただけの加工するのじびつの組み立てがじつの、等々。

「うやうやしく俺は、厄介な話題を振ってしまったよ。うだ。少女は先ほどの笑顔より少し薄れて語つてゐる。

少女は先ほどの笑顔よりもさらに輝いて語っている。

途中からはもう俺ではなく空に向かって語っていたから、忘れられてるんだろうなあ、と思いながら話が終わるのを馬鹿正直に待つた。

何故その時に帰らなかつたのか……。

「……どうわけなんですかー、あ、興味があるんやつたりやつてみます?」

「あ、ああ。そうしたいのは山々だが……」

いきなり話を振られ、思い出して後ろに振り向くと、賢姉はふう、とため息をついて俺のほうに歩いてきた。

賢姉なら、賢姉なら俺をここから救つてくれるかも……………！

「面白そうだし、試してみなさい」

この鬼！ 火に油を注ぎやがった！

「やあやあ、どうもー。」おじいちゃんを通じて……。」を回して、だせい。

!

「あ、はい。」「ですか…」

賢姉が進めて勢いがついてしまった少女に負けて、絡繆について

いる取っ手を回してみる。
それなりに力を込めないと回せない様だが、
回すたびに少しづつ

竹が編まれていいく。

なるほど。

これは確かに便利かも知れない。竹を短時間で編めれば、生産量も劇的に増加するだろ？

だがまあ……。

「側面が編めるのは分かったが、底はどうするんだこれ」

「あいたあ！　お兄さん痛いといつこしてきますねえ……。まあ、そこはノリで」

ノリかよ。

もう少し改良しないと使い物にはならないか。

そのまま何気なくグルグルと取つ手を回していくと、絡繩の様子が変わってきた。

「う、黒い煙がモクモクと。

それから絡繩自体が小刻みに震えていく。

「　あつ！　お兄さんもう回したらあきませんで！　その回したら……」

少女が言い終わるかどつかという所で、絡繩がよりいっとう激しく震えだし……。

ドンッ！――――

と俺の田の前で爆発した。

擬音を使わないと表現できない爆発だったよ。

「あひや～。やつぱダメやつたかあ

……やつぱ？ やつぱって何だ。

「これ実は竹の強度にまだ耐えられんのです。せやからたまつて
うして爆発してまつねん」

俺は無言で、手に残った取つ手を捨てながら立ち上がる。

「じゅあこの竹籠は？」

「あ、これは手作りです。この絡繹で作ったのは一個もありません

賢姉と話す少女の背後に立ち、静かに左手を上げる。

「この嬢ちゃんは……！」

「んなもんを、試させんなー！」

そして少女の頭に思いつきり叩きつける。

ゴッ！と音がして、少女が頭を押されてしまった。

「こつづ～……！ 乙女に何すんねんないきなつ！」

しかし少女はすぐに復活して俺に抗議していく。
文句を言いたいのは俺の方だ！

「爆発するようなもんを店先に置くんじゃねえ！　つてか客に試さ
すな！」

「……あ～、いやまあ、田立つかなあつて思つて…あはは」

「悪い意味で目立つたがな！　詫びて竹籠売りやがれ！」

「へ？」

「竹籠を一つ！　いくらだチクシヨウめ！」

「あ、ああ、毎度！」

「……どんな怒り方よ」

その後は特に目立つたこともなく、約束の時刻に集合場所に行くと何故か春蘭と秋蘭も竹籠を片手にしていた。

余談だが、猫の土産にと櫛を渡すと、予想外に罵倒された。季衣は肉まんを十個くらい持つていったら喜んでいた。

休暇？ — (後書き)

最後のほうの地の文が雑になってしまった。
申し訳ない……急いだもので……。

あと回説へひらい。

これからいて思つたんですが、あの子次の話で出て来るんでは？

筆頭武官の朝は早い。
それはもう激しく早い。

具体的に言つなら、まだ外が暗いうちに目を覚まし、顔を洗つて中庭で鍛錬してそのまま調練に向かうくらい早い。
さらに言つなら賊の報があつたらいつなんどき何時なんどきであらうと飛び起きて出陣する。

何故そんな激務になつているか。

それは、ここ最近になつて今までにないほど賊の動きが活発化しているからだ。

賊は規模も活動範囲も拡大していく、領地のあちこちで暴走している。

そして馬鹿馬鹿しい話だが、それだけ急いで駆けつけてそこにいるのは賊とは言えないただの暴徒。

ついさつきまでただの農民でした、と言わんばかりの者共ばかり。おかげで皆殺しは楽だが……。

数だけは一人前に揃つてゐるらしく、いくら殺しても害虫の如く湧いてくるから堪つたものではない。

ここまで実戦が嬉しくないのは初めてだ。

今日の朝議の席でも、やはり問題になつたのはその賊の事。
季衣と共に鎮圧から帰つたばかりの俺も休む暇なく朝議に参加していた。

「華景、季衣、今回の賊はどうだったの？」

「それが、また黄色い布を巻いた賊でした…」

「ふざけた事にな。俺達が到着したら蜘蛛の子を散らすが如く、つてところだ。

お陰で無駄な体力を使つ羽目になった

到着したとたんに追撃戦になつたものだから、無駄に走ることになつて疲れた。

賊なら賊らしく素直に殺されろよ。

「やつ。またなのね」

「最近では、他の領地でも同じように黄色い布を巻いた賊徒が出没しているようです。

おそらく、大陸全土で一斉に蜂起しているものかと」

猫の情報網に引っかかるほどに、今回の賊は厄介だといつ事か。確かに、今までとは規模も活動範囲も拡大している。

「そついえば、この間連れ帰つた奴はどうした?
まだ何の報告も受けていないが」

前に鎮圧に赴いた際に、殺し損ねた奴をそのまま連れ帰つた。
そいつの尋問は俺はしていないから、どうなつたのか知らないのだ。

「あの者からは、ほとんど有益な情報は聞き出せませんでした。
唯一、首魁の名は張角という者だという事だけです」

俺の質問に秋蘭が答える。

張角……張角ね。聞いた事も無い名だ。
まったく知られないように情報操作をしているのか、本当に知らないのか。

どちらにせよ面倒なことだ。

「となると、地道に情報収集するより他にないか。
次の鎮圧のときにも何人か連れ帰るにしよう」

まあ、次の鎮圧は俺じゃないがな。
流石に体にガタがきてる。

それは春蘭や秋蘭も同じだろうが、次は一人に任せて俺は早く寝たい。

こんなところで過労で倒れたら田も当たらないし。

「そうしてちょうどいい。さて、そうなると……」

「会議中失礼いたします！」

会議の席に、一人の兵士が転がるように駆け込んでくる。
相当慌てているようだが、また何か厄介ごとか？

「何事だ！？」

春蘭が兵士に怒鳴る。

兵士は急いで礼を取ると、早口で報告を始めた。

「ほ、報告します！ 西方の村に、黄色い布を着けた賊が現れたと

の」とです！

おいおい早速かよ……。

休む間もないな、本当に。

「さつそく情報源が出てきたわね。

今回は誰が行ってくれるのかしら？」

「はい！ ボクが行きます！」

賢姉の言葉に、俺の隣にいる季衣がすぐさま手を上げた。
いや、お前さつと帰ってきたばかりだからな？ 普通休むところだぞ？

「季衣、貴方は今日は休んでいいなさい。最近ろくに休んでないでしょ？」「

「だ、大丈夫ですよ！ ボク、村のみんなみたいに困ってる人を助けたいんですよ！」

いやいや、誰も季衣が元気かどうかなんて聞いてないんだよ。

「そうね……。確かに季衣のその思いは尊いものだけど、やうして無茶をして体を壊しては元も子もないでしょう？」「

「む、無茶なんか……してません……」

賢姉に促されても季衣はまだ食い下がる。
なかなかに面倒な……。

「……季衣、聞きなさい。

今ここで貴方が無茶をして、目の前の百人が救えたとしましょう。でもその無茶のせいであれから救えた数万の民が救えなくなるかもしれない。

……分かるわね？」

一人が無茶をすれば、他の奴も引っ張られる。そして伝播すると止められなくなるからな。

「……だったら……だったら、その百人は見殺しにするんですか！？」

「するわけがないでしょ！」

……あーあー、賢姉が怒ったよ。

今まさに賊が来てるつてのに。

「馬鹿にするな！ 私は目の前の百の民も、この先の数万の民も救つてみせる！」

……そのためにも、季衣に今倒れられては困るの

賢姉にそこまで言われても、どうしても季衣は納得がいかないらしい。

目に涙をいっぱいに溜めて、飛び出してしまつ。

賢姉はそれをため息混じりに見送った。

「……では、今回の鎮圧には春蘭に行ってもらひつわ。
疲れているでしょうけどお願ひね」

「御意！ お任せ下さい！」

元気な春蘭の返事を最後に、朝議は終了した。
が、出て行こうとしたら賢姉に止められました。

「華景。少しいいかしら？」

「睡眠時間を余分に確保してくれるなんなら」

「季衣の事なのだけれど……」

俺の要求は無視ですか、そりですか。
無理なのは分かつてるけどまあ……。

つて、それより季衣か。

「ああ、あれか。若氣の至りだろ？」

まだ子どもの季衣は自分が動いていないと落ち着いていられない
んだろう。

賊から眠を守るとこつ使命感にとりわけている。

「それとなく様子を見てきてあげてほしこの。頼めるっ？」

「……俺が行つたら余計にくみそつだが」

いかんせん俺は口が悪いから、季衣には辛い」とを言つやうだ。
といふか、ぶつちやけ寝たい。

「やうはなんとかなれ。頼んだわよ」

なんと強引な！ 横暴だ！

と抗議する間もなく、賢姉は去つていった。

……あー、季衣は何処にいるのやう。

季衣を探して約一刻。

貴重な睡眠時間を削つて城内を探し回つ、よつやく城壁の上に居るのを見つけた。

そこまで上つて近づいていくと、びつやら随間の活気に溢れる城下町を見下ろして何やら考え込んでいる様子。

見つけたら即刻鉄拳を下して寝てやううと思つて息巻いていたが、季衣の様子を見てそんな事をすべきではないと分かった。

どうやら、思つた以上に重症なようだ。

「……何してんだ」

季衣の真後ろまで近づいて声を掛けると、季衣は驚いて振り返り、俺の顔を見た。

「兄ちゃん…」

「何を悩んでるのか知らないが、考えるだけ無駄だと思つがな」

季衣の隣に腰を下ろし、同じように街を見下す。

俺達が守ってきた、守つていいく民達の日常が広がっている。ほんの一歩の風景ではあるが、活気に溢れているのをみると苦労した甲斐があったと思える。

「……兄ちゃん。ボク、本当に無茶なんかしてないよ

まだ言つかこの嬢ちゃんは。

「そうかい。だがな、季衣の隊の連中は随分と疲弊してるだ。いや、あいつらだけじゃない。賢姉のとこも、俺の隊も、春蘭も、秋蘭もだ。

こんな状況じゃなかつたらひとつと休暇を取つて休ませたいくらいにな

馬鹿みたいに次々に賊が現れてくれるもんだから、休みたくても休めない。

「それでもなんとか順番に休めるように仕事を回してんだ。他の奴を信用して、そいつならやつてくれると思つて、ぶつ倒れないようこいつと休む。

季衣。お前はどうだ？ お前は春蘭や秋蘭を信用出来ないのか？

「そ、そんなことないよー」

「ふむ。なら、信じて待つていてやれ。

今俺達の仕事は、黙つて速やかに寝ることだ

最後に季衣の頭を少し乱暴に撫で回し、俺は笑った。季衣もそれを見ると、釣られて笑顔になる。

やはり季衣は先ほどの陰鬱な顔ではなく、じつじつ笑っているほうがずっといい。

この方がからかい甲斐があるしな。

גַּתְּתָה

ボクだけじゃ……ないんだよね」

「おつ。分かつたら寝るぞー。」

アーチャーが叫ぶ。――

これで寝れるううう！！！！

内心で歓喜しながら立ち上がり、城内に戻ろうとするが、季衣の

「つゞやにどいかで聞いた事のある、しかし思い出せない歌。明るい曲調のそれを、季衣は楽しそうに歌い上げる。

「」

練習したのか、止まることなく歌つている。

……どこで聞いたかな、これ。

」

「なあ季衣。それ、何処で聞いた？」

歌い終わるのを待つて、俺の胸の中のもやもやは消すべく季衣に
聞いてみた。

「え？　えっと…旅芸人のお姉さんが歌つてたんだ。確か名前は張角…あつ！」

ほう。張角とな？

聞いた事があるなあ。ついさっき、朝議の場で。

「さあ、季衣。寝ようか」

「華景兄ちゃん！　華琳様に報告しないと！」

嫌だ！　これ以上睡眠時間を削られて堪るか！　俺は寝る！

季衣の怪力に引き摺られながら、結局俺は賢姉のところに報告に行くのだった。

五話（後書き）

ところで、種馬こと一刀クンは何処所属にしましょう?
もちろん魏は無理です。断固拒否します。
だって、彼が居たらあの子が！

六話（前書き）

予想外に短くなつた……。
これ、前の話に繋いだほうが良かつたかな……？

あの後、賢姉に報告に行つてから春蘭が鎮圧から戻るのを待ち、軍議が開かれる事となつた。

そりやあ首魁の正体が分かつたら軍議にもなる。帰つてきたばかりで休む間もなく軍議にでている春蘭には、何故か疲れが見えなかつた。

むしろやる気がみなぎつているように見える。対して俺は溜まつていた書類仕事を片付けてぐつたりしている。

報告書やら賢姉の手伝いやら、やれることをやつていただけだが。

そのせいでも常備している菓子も無いからさうに疲労感倍増。もう最高に最低な気分だぜ……。

それはさておき、季衣の報告から分かつた事は二つ。

一つは、張角といつのは女の旅芸人だといつこと。もう一つは、張角には一人の姉、ないし妹がいるといつ事。

「この陳留に来たことがある」とから、季衣の他にも見たものはないはずだ。

そいつらを見つける事が出来れば、色々と使い道があるかもしない。

「首魁の正体が分かつたのは確かに前進だけれど、出来ることがない。その目的も知りたいわね……」

目的、ね。ただの下劣な輩なら天下をとるとか、そつこつたこと

を言つてくれりや樂でいいんだが。

實際は何も分からぬ。目的が分からなければ、敵がどう動くか
も予想しずらいで困り者だ。

「目的……ですか。……見当もつきませんね」

「だな。だがよ、首魁が歌手なのはさておき、あいつら新しい宗教
でも始めたんじゃないかな？」

「こんだけ暴走してんだ。全体を制御できてるとは思えないが」

大方、信者が教えを歪んだ解釈でもしてるんじゃないかと思つ。
それなら首魁が誰だろ？と関係ない。都合のいいことを言う奴を
祭り上げれば良いだけなんだから。

そしてそれは、誰にも止められる事無く暴走していくことになる。

「もしそうなら尚更タチが悪いわ。いつそ大陸制覇でも諱ってくれ
れば遠慮なく叩き潰せるのだけれど。

昨日、都から正式に『黄巾の賊徒を早急に平定せよ』と軍令が届
いたのだし

「……相変わらずクソみたいな対応の遅さだな。流石は華の都だ」

賢姉からそれを聞くなり、俺は朝廷のあまりの対応の遅さに思わ
ず舌打ちとともに悪態をついていた。

どうせあの種無しの爺共が渋つてたんだろう。
名ばかりの大将軍殿も当てにならないし、朝廷を早急に潰すべき
じゃないのか。

「ほ、報告します！」

軍議の最中、先日と同じく一人の兵士が駆け込んでくる。
そして、やはり先日と同じく大慌てで礼をとった。

ああもうー またか！

「今度は何だー？」

「そ、それが……また黄色い布の賊が現れました。
それも、今までよりも大規模ですー！」

「言つた傍からわらわらと…………ー

お呼びじやねえぞクソがーー！」

「さつさき帰還したばかりだぞー！ どうなつてやがるーー？」

「落ち着きなさい、華景」

「だがー…………いや…………だな」

「そうだ……ここに怒鳴つても事態は好転するわけもない。
どうも冷静さを欠きやすくなつてるな。」

一度深呼吸をして、気持ちを静める。
激情に駆られた心を落ち着け、事を冷静に考えるよつこ。

そうして俺が落ち着くのを見計りつて、賢姉は話を進めた。

「秋蘭、兵の準備はどの程度で済む？」

「申し訳ありません。物資搬入が明日の明朝でしたので、すでに兵達は休ませています」

「……そう。間が悪かったわね。おそらくは、いくつかの暴徒が寄り集まつたのでしょう。

これまでのようにはいかないわ」

命令系統が出来たか。吠えたら散る雑魚から嬉しくない格上げだ。それなりの指揮官を得たんだろうな。厄介極まりない。

さて、時間もないし、どうしたものか。

「華琳様！ ボクが行きます！」

そしてこんな時にまた季衣が声を上げる。

先日以上にやる気に満ちているらしい。

しかし今回は、前のよつた焦りは季衣から見えなかつた。

「おい季衣、お前は休めつゝただろうが

「大丈夫だよ！ もう十分休んだし、それにもう無茶はしないから今度は無謀な事をしないだろうな？」

少し学んで賢くなつたとはいえ、それが心配だ。

無茶しなくなる代わりに、一度の戦闘に全力を注ぎすぎて無謀なことをする。

若氣の至りではあるが、それが命を奪いかねない。

が、付いて行く奴がそれを止めればいいだけの話もある、か。

「……ださうだ。今回は季衣に行かせたりびつだ？」

「先日は何も言わなかつた華景がさう言つなら、季衣に任せましょ
うか。

ちゃんと責任持つて面倒見なさいよ？」

賢姉は俺の言葉に頷き、同時に俺に行けと言つて來た。
まあ、たきつけたのは俺だし行くけども。

「分かつてゐ。せいぜい頑張りますって」

「あ、ありがとうございます！」

「しつかりやりなさい。

桂花、すぐに動かせる部隊はある？」

「はつ。当直の隊ならば、少数ではありますが

「すぐに出陣準備に取り掛かつて。事は急を要するわ

「御意

「ではこれにて軍議を終わります。

一人とも、頼んだわよ

「「御意ー。」「

まあ、今回に限つては引きこもつてればいいだけなんだし、楽だ
よな？

六話（後書き）

一刀クンのルートの関するたくさんの「」意見ありがとうございます！
彼が出るのは当分先ですので、まだ「」意見ありましたらどうぞ！

昭四、ついにあの子が登場！

今度こそ、今度こそ出ます！出します！

待つてゐるかの如きは、少くも一回は

先遣隊として季衣と共に出陣した俺達は、その日の夕刻に報告にあつた街に到着した。

街にはどうやら運よく義勇軍がいたらしく、四方を即席の柵で囲うなどして防衛戦に備えていた。

それはいい。

対策をしつかりとすれば、本隊が来るまで耐えられるようになる。こちらは寡兵とはいえ、防ぐだけなら幾らでも手はあるものだ。じゅうじゅうが準備不足なように、敵も数だけの鳥合の衆なのだから。

問題なのは……

「あーー！ あん時のお兄さんやないか！」

「あー、竹籠の売り子をやつていた嬢ちゃんじやないかー」

「なんやえらい棒読みやな……」

いや、確かにこの子がいたのにも驚いたよ？

まさかあの時の（いろんな意味で）爆発娘がこんなところで義勇軍の指揮官やつてるのはびっくりしたよ？

だが、このときの俺は、別の事に気をとられていたんだ。

爆発娘の隣に並んでいるもう一人の指揮官。

その片割れの、全身に古傷がある銀髪の凛々しい少女。少し癖毛のか犬耳のように両側が跳ねていて、後ろは三三編みにしている、手甲をはめた少女に、俺は田を奪われていた。

「ん？　お兄さん、どないしたん？」

「せつときから田ちゃんの方を見てほひつとじてゐるー」

「いや、私ではないだらう」

三人が何やらわいわいと言つてゐるが、そんなことはビツでもいい。

俺は銀髪の少女に歩み寄ると、その田をじつと見つめた。

「あ……あの……何か？」

「結婚しよう」

「は？」

「へ？」

「ええ？」

「こや？」

啞然とする三人娘と季衣の反応を無視して、俺は素早く少女の手をとる。

「式はいつにしようか？ 子どもは何人欲しい？ どんな家を建てようか？」

広いほうがいいか？ いやいや多少狭いほうが暮らしやすいか？ 庭はあつたほうがいいかな？

あ、そうだ！ 何か動物を飼おう！ 犬と猫、どちらがいい？ 僕としては猫をお勧めしたい！

あ、子どもの名前はどんな名がいい？ 男の子でも女の子でもいいが、きっと凛々しい名が似合うはずだ！

どうせなら子どもは一人は欲しいな！ 男の子と女の子と一人ずつなんてどうだ？ きっと可愛らしくて聰明な子に育つだろうな。

そうだ、式には誰を呼ぼうか？ 賢姉と夏候姉妹と季衣と君の友人の二人は決定として

「

「ちょ、ちょと待って下さい！」

「ん？ どうかしたか？」

将来について熱弁する俺を銀髪に少女に止められる。顔を赤くしながら慌てているのも可愛いなあ。

「あの、その、いきなりそう言われましても……まだ、お互いの事をよく知りませんし……」

「おつと、それは失礼した。まずは健全なお付き合いからというわけだな？」

ではまず自己紹介から。俺は曹丕。字を子桓という。州牧である曹操様の下で武官をしている者だ。

趣味は鍛錬と甘味処巡り。特技は菓子作り。好きなものは甘いものと辛いもの。嫌いなものは苦いものだ。

普段は兵達の調練などをしているが、休日には

「

「ちょい待てー！ー」

血口紹介の最中に、俺と少女の間に爆発娘（仮）が割り込んでき
た。

そのせいでの少女の手を離してしまつ。

「……なんだ爆発娘（仮）。俺は今猛烈に忙しい。
お前の用事は後にしり」

「お兄さんの血口紹介は長いねん！」

今はお兄さんが風を口説き落とすのを待つてうるほど時間無い
ねんでー。」

「せうなのー！ それに、まだ沙和たちは血口紹介していないのー！

「……そりこえばそりだつたな。
お前達の名はなんと言ひ？」

割り込んできた二人の向こう側にいる少女に問いかける。
まつりとしていた少女は、急に聞かれたことに慌てて名を名乗
った。

「あ、はつー。姓を楽、名を進、字を文謙と申します」

「つやは李典。字は曼成ぃいます。よろしうつ」

「沙和は千禁なのー。字は文則なのー」

ふむ。樂進と李典と千禁か。

とりあえずは覚えた。

「季衣、挨拶を」

「うん！ ボクは許緒だよ！ よろしくね」

俺の後ろに立っている季衣にも挨拶をさせて、全員の自己紹介は終わった。

さて、遊ぶのも大概にして、そろそろ配置決めでもするか。

「とりあえず、仮設置した本陣に行くぞ。
すべきことは山にある」

樂進 side

先ほどから、曹不様には驚かされてばかりだ。

会つていきなり……」「、婚約を申し込まれたのもそうだが、名を
聞いてあの曹操様の弟君として名高い曹不様だと聞かされたのにも
驚いた。

噂を聞く限りでは、武に秀で、大鎌を手に戦場を駆ける様は死神
のようだと言つ。

初めは無骨な大男だと思っていたが、それがこんな容姿端整な方
とは思わなかつた。

仮の本陣に入ると、曹不様は早速現状の確認を始めた。

「義勇軍の兵力は？」

「五百です」

「俺達の隊もだいたい五百前後。対して敵は三倍強。

……村の立地からすると、東西と南北に兵を置くべきか。

『弓兵と歩兵を均等に分けて置くとして、誰を何処に置くかだが……』

…

先ほどとは打って変わつて真剣な表情を浮かべる曹不様。
……わざのあれは冗談だったのだろうか、と思えてしまう。

「…樂進、干禁」

「はつ…」

「はいなのー」

「お前達は南側の指揮を執れ。李典、季衣は西側。俺は東の指揮を執る」

「へ解やー」

「うん！ 任せでー！」

「いいが。誰一人として通すな。明日の明け方まで、何としても耐え切れ。

俺達の後ろには力なき者たちがいる。何があろうとも、負けることは許さん

鋭い眼光を宿した曹丕様が、全員の顔を睨むように見回す。その目に体を貫かれたような錯覚を覚え、私達は思わず姿勢を正した。

霸王の弟君とは、これほどのものなのか。

「分かつたら、往け」

「御意…」「

迷う事無く臣下の礼をとつた私達は指示された持ち場へと駆けていった。

華景 side

解散して持ち場に着くと、すでに田前には黄巾を巻いた賊が群れを成して迫っていた。

東側の敵は、ざつと見て千。対してこちらは五百にも満たない。だが、一人につき三人も殺せば済む話だ。

「配置に着け！ 接敵するまえに矢で勢いを削ぎ落とすぞ…」

弓兵に指示を出し、即座に構えさせる。
後、少し……。

「……掃射！」

合図と共に数十の矢が賊共に飛来する。それらは賊の前曲に降り注ぎ、敵の命を奪っていく。

しかしそまだ勢いは衰えない。仲間の屍を踏み越えて、奴らは前進していく。

「第一射構え！……放て！！」

二度目の掃射を放ち、少しだけ賊の勢いが落ちる。だが、もう距離が無い。接敵する。

「ちつ！ 予想以上に調子付いてやがる。

いいか！ 一匹たりとも通すな！ 死んでも守り通せ！」

「「応つ！」「

「こちらの部隊の士気は高く、威勢のいい返事を聞くと、前線が接敵した。

それから数刻。

物量で押してくる賊を技量と士気の高さで抑え込んでいた東の隊だつたが、流石に辛いものがあった。

敵の数は半分ほどまで減りはしたが、こちらの負傷兵も段々と増えている。

やはり、数の不利はなんともし難いな。

ここで俺が特攻してもいいが、そうすると指揮をとる者が居なくなるから動くに動けない。

と言いつつ、俺は前線で敵の首を刈り取る。

弓兵には部隊長の指示に従つて敵陣の中央を狙い撃つように指示しておいた。

そして俺は、押されて前線に出てきたのだ。

「邪魔だ」

悪態を吐きながら襲い掛かってきた数人の首を、大鎌を薙いで斬りおとす。

本隊が来るまで後どれくらいだ？

振り向きざまに背後にいた敵を肩から引き裂く。
今まで……ちょうど百人目か。

ふと周りを見れば、俺の周囲には死体の山が築かれていた。
俺が通つてきた道にも、点々と道しるべのように屍が転がっている。

それを見て臆したのか、賊共は先ほどから俺に近づいてこよつとしない。

「……これで仕舞いか？」

この分なら、他の連中も大丈夫だろ？
結構意気込んでたんだが、張り切るだけ無駄だったか？

血塗れの大鎌を一振りして血を飛ばし、肩に担ぐ。
ああ、また服が血塗れだ。せっかくの外套も台無しだな……。

「伝令！」

息を切らして、本陣の方から兵士が走つてくる。

「言え」

「はっ！ 南方よりこちらに向かって いる軍を発見いたしました！」

「旗は？」

「青地に曹、夏の文字です。」

おうおひ、ひおひやつと到着か。
これでよいやへ反撃に移れるな。

「了解した。……總員に告ぐ！ これより我らは、反撃に移る！ 全力で屠れ！ 残らず駆逐しろ！」

轟き出す血を抑えず、俺は兵達よりも早く賊の中に特攻していく

た。

「……つと、言つわたくです、はい」

「へえ、そう。で？」

「……ほ、報告は、以上、です」

地面上に正座した上に錘を置かれながら、俺は正面に座る賢姉にとの次第を報告していた。

あの後、賢姉たちの本隊が到着したことで形勢は逆転し、賊共はあっせりと鎮圧された。

その後、俺と季衣は三人娘を連れて賢姉に報告。

結論からいえば、三人娘は賢姉の元に仕える事となつた。
その際、俺が賢姉の目の前で樂進、凪の手を握つて喜びを露わにしながら再び求婚し、現状に至る。

「凪としてはどうなの？」この愚弟の事は

「わ、私は……」

今まさに渦中の人である（俺が引きずり込んだ）凪は、俺と賢姉を交互に見ながらおろおろと戸惑っている。

が、その表情をあまり見れない俺は、ひたすらこの拷問に耐えるしかない。

「貴方がいいのであれば、この愚弟はあげるわ。

こんな愚弟でよければ、だけど。

脳筋で馬鹿で特攻大好きで甘いものに目が無い愚弟でよければね

……酷い言われようだ。

いや、確かに賢姉からすればそうかもしないが。

「いえ、あの、華景様はとても立派なお方だと思います……」

「おお、凪！　お前は良い子だなあ！」

「まだ分からぬのでしょう。答えを聞くのは、先でもよろしいのでは？」

困惑する凪を見かねて、秋蘭が助け舟を出した。

「ついに凪にも春が来たんかあ！　めでたいなあ！」

「なの――。」

姦しい一人は放つておひづ。
まるで話を聞いていない。

「……そうね。でも、必ず答えは聞かせてもらひわよ」

「……まつ」

「ひつして、曹操軍に新たに三人の将が加わることとなつた。

七話（後書き）

余談ですが、これがやりたくて仕方なかつたのですが、書いた後に若干詰まりました。

ご意見お待ちしております。

みっしゃああああ！

ラスト一時間でなんとか完成したぞ！

黄巾の賊を討伐し、凪たちが傘下に加わってから数日。その間に国の体制に若干の変更や改善などがあった。

例えば、城下町の警備に対する改善案。

今まででは人員が足りていないことが原因であまり治安維持などを気にかける余裕が無かつたために、少数の部隊を巡回させるなどしていたが事が起こつてからの対応が遅く、民から不満の声が上がっていた。

それを凪、真桜、沙和の三人と義勇軍が来たことで人員不足が解消され、しつかりとした警備体制を敷くことが出来る様になつた。新規に徴兵した若い兵、いわゆる新兵の奴らもそこに配属させ、三人に調練をさせることで正規軍の水準もある程度は上がるはずだ。

で、経験の浅いこの三人を將軍として鍛えるための人間が必要になつた。

個人の武もそうだが、他の書類仕事やら調練のやり方やら、教える事は山とある。

そしてその教育係は、俺になつた。

元は俺が賢姉に推して加わったわけだからしつかり面倒見ろ、といつお達しもあつたりなかつたり。

それに秋蘭は政務を手伝つてゐるし、春蘭は人にモノを教えるのは不得手。

そうなれば当然、俺に回つてくるというのもあつた。

そうして体制を新たにしてからとこりもの、俺の仕事は増える一方。

いや、それはまあ、嬉しくはないが構わない。

今までの報告書や雑務に關しての事に加えて、警備隊の山が一つ増えただけだし。

俺が頭を痛めたのは三人の教育を始めてからの事。

休暇返上で三人にあれこれと教えていた今日、新たな警備隊の仕事も細々とした内容が決まつたらしく、俺と三人娘は玉座に呼び出された。

と言つても、俺は警備隊の新制に携わっていた側から今更説明はいらないはずだが。

「…………… という事になつたから、後の細かい決まりはこの書簡を見なさい」

「…………賢姉、端折り過ぎではないか？」

口頭で説明された内容を纏めると、警備隊の駐屯所を数箇所に増やして物見櫓を建てるよ。後は書簡見てね！

いや、もつと他に重要な事が無かつたか？ それともあれか。実は書簡に重要な事がさらりと載つてゐるのか？

「分かつてゐるわよ。でも私もまだやる事が多くてあまり時間を割けないの。

そのために華景を呼んだのだから、しつかり仕事なさい」

「あー、そのための俺ですか。…………了解」

賢姉に任せられた（丸投げされたとも言つ）仕事を拒否する気はない、俺は二つ返事で承諾していた。

それを聞くと、賢姉は書簡を四つ俺に渡して早々に玉座を後にした。

後に残された俺達は、とりあえず渡された書簡を全員に回し、俺も念のためそれを開いて読んでみる。

「えらい量あるなあ……」

「読むの面倒なのー……」

開いた書簡には、二人がうんざりするのも分かるほどにびっかりと規定が書き込まれていた。巡回経路について、不審者発見時の対処法、巡回する際の注意事項等々。それらが小さな文字でこれでもかと敷き詰められている。

確かにこれはため息を吐きたくなるのも分かるが、文句を言つ一人の隣で、嵐だけは生真面目に書簡を隅々まで読んでいた。もしかして、この規定を全て暗記するつもりだろうか？……流石にそれは、無理だよな。

嵐が読み終わるのを見計らつて、俺は先ほど大雑把に賢姉がしていた説明を引き継いで話を始めた。

「まあ、文句は後で執務室で言い合ってくれ。
でだ。この警備隊だが、お前らの主な仕事は新兵及び警備隊の訓練と城下町の治安維持。

本来はこれにもう少しはあるが、それはお前らが慣れるまでは俺がしておく。

そして、お前らの当面の目標だが、最低でもこの街の道は一つ残

らず覚える。これは当然だな

「ええ！？ そんなの無理なのー！」

「こない広い街の道全部なんて無理やつて！ お兄さん鬼か！」

「文句は後で賢姉に直談判してこい。または早々に諦めて覚える。さて、じゃあ早速街に行くとするか。今田だけだが、俺が案内役だ。

全員で揃つて回るのも今日だけ、だな。付いて来い

「はい！」

「お兄さんの鬼！ 人でなし！」

「鬼畜なのー！ 横暴なのー！」

俺は愉快な事を口走る一人に鉄拳制裁を加えて黙らせ、一人の襟を掴んで歩き出した。

ちなみに、しつかりと返事を返してきた凧には後でお菓子を渡した。断られた。

城下町に着いた俺達は、とりあえず二人に道案内をすべく街を練り歩くことにした。

もつ毎を過ぎてこるとほいえ、まだまだ街は騒がしい。

「街はいつ来ても活気に溢れてんなんあ」

「まあ、街の発展は賢姉や猫の賜物だな。それを守るのが、これらのお前達の仕事だ」

「うう……そう言われると責任重大なのー」

「だが、遣り甲斐のある仕事だとと思つ」

「そうとも言える。お前達の仕事振り如何で、民から賢姉の評価が変わらんだからな。

……だが、そう肩肘張らずにやせる事をやつてればいいだけだ」

談笑しながら、大通りやそこから伸びる裏通りを確認して歩く。

「この通りは飯店が主だ。ここをもう少し行つた所にはなかなかいい甘味処があつてな。

後……いや、それはいいか。この辺りはあまり裏通りは無いから、少し急ぐぞ」

「はい。分かりました」

素直に返事をしてついて来る凧を見て、真桜たちがはあ、とため息を吐いた。

「凧は固すぎるわ。もう少し楽にしたらうえのに

「初仕事で張り切つてるから仕方ないの一ー」

「真桜、沙和。眞面目にしないか」

二人に注意しながら、凪の視線は常に周囲に向けられている。初日から随分と張り切っているのが、傍目からでもよく分かる。こう、肩から鬪氣でも発しているようだ。

凪に二人が注意されつつ、さらに街の説明をして歩いていると。

「あーーーーー！」

「つー？ 沙和！ 何かあつたか！？」

いきなり叫び声を上げた沙和に驚きながらも、全員の視線が一斉にそちらに向けられる。

俺の後ろを付いて来ていたはずの沙和は、いつの間にやら一軒の書店の前に移動して異常に喜んでいた。

その手には、一冊の本がしっかりと握られている。

「阿蘇阿蘇の最新号なのー！ こんなところにあつたなんて信じられないのー！」

阿蘇阿蘇つてお前……いや、俺も甘味処の話したけども。だからつてお前、今それを見つけたからって騒ぐか？

「沙和……」

凪の拳が若干震えている。

そういえば、冂は氣の使い手だつたか。

手合わせをした時に氣弾を撃たれて焦つたのは、記憶に新しい。その時は……反射で氣弾を蹴り上げたんだつた。蹴り上げた足が痺れて苦戦したなあ。

と、それはさておき。

俺はクルクルと回りながら喜ぶ沙和の手から、阿蘇阿蘇とやらを素早く取り上げた。

「あー！　返してなのーー！」

「後で買え、後で。店主に取り置きでもしてもいいえ」

「そんなー！　最後の一弔なのーー！」

「はいはい、後でなー！」

一応これも仕事のうちだ。

俺だつて真面目にしてるんだぜ？

沙和が届かないように掲げた阿蘇阿蘇を取り返そうと跳ねる沙和を尻目に、店主に渡そうとしたところだ……。

「ああああああーーーーーーーー！」

「真桜ー？　どうしたー！」

次は通りの反対の店で真桜が叫んだ。
阿蘇阿蘇を店主に押し付け、急いでそちらに駆けつける。

そして、そこには先ほどの沙和を再現したような状態の真桜が回っていた。

手にしているのは……な、何だあれ？

「限定版絡繆夏候惇やないか！ 製造停止されて図らずも数量限定になつてものじつづ貴重なあの幻の一！ それがこないな店に置いてるやなんて……」これはまあじく運命や！」

おお、沙和以上に熱く語つてらっしゃる。

というか、あればまだ残つてたんだなあ。

どいつも物好きが作ったのか知らないが、春蘭の許可も取らずに販売してたのを本人が見つけて、怒り狂つて壊しまくったはずだが。春蘭に発見されずに生き残つていたか。頑張つたな。それも今日で終わりだが。

凪が怒り出す前にさつと真桜に詰め寄つて、先ほどと同じく取り上げて高々と掲げる。

「ああ！ もう戻したつてえな！ それめりやくめりや貴重やねん！」

「後で春蘭に渡しどくから、春蘭から受け取つてくれ

「それ確實に壊されるとやないか！」の鬼一・鬼畜一・

「……お前、給料が愉快な事になりたいりじいな

「ちよ！ それは卑怯やで！」

やさやややと並んでる真桜を賣つゝ、いざもまた店主に預けようとした。

そう、『したんだ。

店主にそれを渡す直前に、一人にため息を吐いていた皿の動きが
変わるのが見えた。

「おー！ そこのお嬢ー。」

嵐は鋭い声色で、隣の商店から出てきた男に怒鳴りつける。すると男は、何を思ったのか全速力でその場から逃走しだした。

「待て！ 逃がすか！」

風は中腰になり、両手を光らせながら氣を溜めていく。
あー、あれつてもしかしながら氣彈だよなあ。
あれ喰らつたら無事じやすまないだろうなあ。

主に街が。

「ちよつと待てええええーーー！」

「はああああああああ……」

俺の制止する声も空しく、凪は渾身の氣弾を男めがけて放つてしまつた。

氣弾はものの見事に、男もろともその先にあつた民家を巻き込ん

で飛んでいった。

凪は氣弾が開けていつた大穴に入つていくと、完全に氣を失つて
いる男を引き摺りながら戻ってきた。

その顔は、一仕事終えた後の様な清々しさを感じられるよ／＼
そんな顔だった。

「不審者を一名、確保しました！」

いい」とした！ みたいな顔で報告されてもなあ……。

「阿蘇阿蘇買ったのー」

「絡繹夏候惇、無事やつたわあ！」

後ろでは、己の欲に實に忠実な一人組みが安堵したような声で話している。

俺は胸いっぱいに空気を吸うと、一回それを止め。

久しぶりに、全力で怒鳴ったのだった。

その日のうちにこの騒動は賢姉たちの元に報告され、俺達四人は
その付近の住人に謝罪と修繕の手伝いをした。

そして城に帰つて賢姉と猫にしこたま絞られ、警備隊の初日は大
騒動を引き起こして終わった。

休日(返上) II(後書き)

遅くなりまして申し訳ないです。

予定外の事が立て続けに起つたもので、更新が遅れました。

さて、廻ちゃんどうしよう。

結構書くのが難しいキャラですね……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172z/>

恋姫無双 曹丕伝

2011年12月30日23時49分発行